「マルチアクター参加による市民間協力推進プロジェクト」第二回検討会

議　事　録

2005年6月12日（日）～13日（月）

於：北海道滝川市

プログラム

6月12日（日）会場：滝川ホテル三浦華園「レインボーホール」

15:00～15:10　開会挨拶および自己紹介

15:10～16:00　滝川市メンバーによるプレゼンテーション

16:00～16:30　質疑応答

16:30～16:45　休憩

16:45～18:15　セッションⅠ「地域社会にとって国際協力を行う意義、メリットは何か」

6月13日（月）会場：滝川ふれ愛の里「多目的研究室」

9:00～10:45　市内の国際協力に関連する施設訪問
(たきかわスカイパーク、手作りの家「とまと」、道の駅たきかわ)

11:30～　各自昼食

12:30～14:30　セッションⅡ「地域レベルで行う国際協力活動の成果として何が考えられるか」

14:30～14:45　休憩

14:45～1:15　セッションⅢ「地域で国際協力を行う上での課題は何か」

16:15～16:30　まとめ

参　加　者

*：12日欠席、**：13日欠席

検討委員

【北海道滝川市】

高谷富士雄*（たかや　ふじお）	たきかわ農業協同組合参事
	滝川市教育委員会委員
	社団法人滝川国際交流協会理事
前田康吉（まえだ　こうきち）	社団法人滝川国際交流協会会長
山内康裕（やまうち　やすひろ）	社団法人滝川国際交流協会事務局次長

【新潟県長岡市】

羽賀友信（はが　とものぶ）	長岡市国際交流センター地球広場センター長
三橋栄治（みつはし　えいじ）	ドラミックス代表

【東京都武蔵野市】

杉澤経子（すぎさわ　みちこ）	武蔵野市国際交流協会プログラム・コーディネーター
山西優二（やまにし　ゆうじ）	早稲田大学文学部教授
横田宗（よこた　はじめ）	NPO法人ACTION代表

【四国】

饗場和彦（あいば　かずひこ）	徳島大学総合科学部助教授、四国NGOネットワーク運営委員
池田幸恵*（いけだ　さちえ）	JICA四国国際協力推進員、四国NGOネットワーク会員
竹内よし子*（たけうち　よしこ）	NPO法人えひめグローバルネットワーク代表 四国NGOネットワーク代表
新田恭子*（にった　やすこ）	NPO法人セカンドハンド代表 四国NGOネットワーク副代表 ゲスト／リソース・パーソン（13日のみ）
田村　弘（たむら　ひろし）	滝川市長
安西輝恭（あんざい　てるやす）	滝川市教育委員会教育長
山木昇（やまき　のぼる）	滝川市議会議員、社団法人滝川国際交流協会副会長 北海道指導農業士（リソースパーソン）

【独立行政法人 国際協力機構（JICA）】

筧　克彦（かけい　かつひこ）	JICA東京国際センター次長
河野善彦（こうの　よしひこ）	JICA国際協力客員専門員
滝村卓司（たきむら　たくじ）	JICA東京連携促進グループ計画・管理チーム職員（事務局）
青木　公（あおき　ひろし）	JICA東京国際協力サポーター（オブザーバー）
藤野紀子（ふじの　のりこ）	JICA市民参加タスクフォース支援ユニット（オブザーバー）

【財団法人 日本国際交流センター】

毛受敏浩（めんじゅ　としひろ）　　チーフ・プログラム・オフィサー

森田慈子（もりた　しげこ）　　プログラム・アシスタント（事務局）

6月12日（日）　会場：滝川ホテル三浦華園「レインボーホール」

開会挨拶および自己紹介

・JICA筧、JCIE毛受、田村滝川市長による挨拶。

・検討委員、事務局自己紹介。

・滝川国際交流協会山内氏による、一般オブザーバーの紹介。

滝川市メンバーによるプレゼンテーション（山内康裕）

・滝川市と世界の関わり：入植時の農業技術者／ドイツ人石油技術者／昭和30年代から南米（ブラジル）への移住が始まった。

【国際交流・協力】

1990年から姉妹都市交流を行っているが、友好親善の交流にとどまらず、「国際協力」の要素を含んだものにしようという動きがあった。

1997年．社団法人滝川国際交流協会発足。

2000年．イリマニの会の活躍もあり、研修生出身国が多様化。

マラウイ農業技術研修員受入れ開始。

2001年．パキスタンからの研修員受入れ開始。

2003年．イリマニの会が毎日国際交流賞を受賞。

2004年．ブータン王国農業技術研修員受入れ開始。

その他、國學院短期大学のモンゴル人留学生との交流やAAEETTと子どもたちの交流（「イングリッシュ・キャンプ」等）をするなど、協力プログラムや研修員受入れについても、必ず市民との接点・交流の場を設けるようにしている。

滝川の国際協力は、マラウイ単体のものではなく、それ以前からの国際交流員の配属や国際交流活動などの上に成り立っている。

離農くい止めの一策として地域のリソースである農業技術による国際協力を行う可能性をJICAに申し出たところ、地域提案型事業にあてはまるということでマラウイを紹介され、研修生受入れが2000年に始まった。これまでに8名を受入れ。手作業の技術などが評価され、自らが教える立場に立つことで地元の農家にとっても学びの機会になり、自信にもつながっている。

【マラウイとの協力の数値的効果】

市内の農家789戸中100戸以上が受入れに関わる。

28名の市民がこれまでにマラウイを訪問。

報道で取り上げられた回数は2004年度で30件。

【課題】

・マラウイを訪問した人々からは、言語の壁などにより、本来伝えたいほどのことを伝えることができないもどかしさがある等の感想が出ている。

・より多くの市民が交流や協力の活動に関わる機会を持ちたい。

・JICAに頼らずに単独でも活動を継続できるようにするにはどうしたらよいか模索している。

・教育分野・学校とも連携を進めたい（展望。）

山木：受入れ当初には戸惑いがあった。次年度も続くのか不安だったが、自分が受入れた特定の研修員とは気があった。近所にも折に触れて紹介しているうちに、先方の地元であるマラウイのことも知る必要があると感じた。初回の「調査」は何から始めたらよいか分からな

かったが、だからこそ1回限りの調査では意味がないと感じ、継続的な事業としての取り組みをJICAに依頼した。また、ただ継続して調査団を派遣するだけでも意味がなく、同じ人物が適当な間隔をあけて訪問を重ねることで、現地での経過をフォローすることができると考える。

日本も過去には他国から助けてもらったという経緯を踏まえて、手伝いたいという気持ちがある。

高谷：協会主導で国際協力活動が展開されている。小さいまちなので、他の都市で発生しているような外国人の人権問題は発生していない。滝川の人口を考えると、これまでに28名の市民がマラウイを訪問していることや、訪問団が帰国後、毎回市民向けに報告会を開催していること、報道での取り上げられ方等評価できる点も多い。しかし、改善の余地も多いにあると思うので、それらについては意見・ご指導いただきたい。

質疑応答（モデレーション：河野）

河野：会場からの質問や意見は？

饗場：四国では、まだなかなか国際協力が「地域ぐるみ」にはならないが、滝川では成功しているようだ。国際交流の開始当初から「国際協力」の要素を入れようという発想がでたのはどのような経緯からか。また、2001年に行ったスタディツアーでは反対があったのか、あったのであれば、どのように説得したのか聞きたい。

山内：反対はあった。病気を懸念するものについては、JICAの現地事務所との協力で行うということを伝えて信頼を得る努力をした。また、訪問の必要性自体を疑問視する声もあったが、参加者を人づてに募った。

田村：協力開始時に私は市企画課長であったが、高齢化・国際化・生涯学習等のメガトレンドに対応するため基金を設立し「国際協力」の体制を整えること（財団づくり等）から始めた。この際、（当時の）市長を含め、国際協力といっても「外国に学ぼう」という発想しかなかった。しかし同時に、初代滝川国際交流協会会長より日本・滝川から貢献する余地もあるのではないかというコメントが出された。

杉澤：事業企画・運営の主体は？もし協会の職員だったとしても発案としては広く市民から集めているのか。

前田：当初の発案は事務局と市三役。現在は、農家側も慣れてきて意見やアドバイスをくれるようになり、それらを適宜反映させている。企画を市民全般に広く求めるには至っていないが、チャリティーコンサートなどへの参加者から国際協力活動に関するコメントが寄せられたりしている。これからも広げていきたい。

高谷：あらゆるセクターから自主的に関わっている人が増えている。異業種の人々が利害関係な

く何かを一緒にやろうという気運が高まっていると思う。

杉澤：スタディツアーの事前学習やフォローアップ、専門家の意見などはどのように取り入れているのか。

山内：専門家としては、國學院短大の教員に関わって欲しいと思っている。また、JICA札幌、JICE、北方圏センターなどからアドバイスをもらっている。フォローとしては、報告書、過去の参加者（参加した小学校の教員とマラウイからの研修生による学級菜園づくり等）の取り組みなどがある。農業技術協力やスタディツアー単体で完結してしまわないようにしたいが、他にもアドバイスをいただきたい。

河野：学校との連携はこれまでもあったのか。また、どのようなスタンスで望んでいるのか。

前田：マラウイ以外からの受入れの際、もし訪問団に教員がいれば滝川の教員と会わせる、といった形での連携はしている。他には、小学校へのAET派遣、教員対象の国際理解ワークショップなど。

安西（教育長）：学校現場では「国際化」に力をいれている。市内にAETが4名いるのは恵まれいてる。以前は中学校のAETを小学校に派遣していたが、現在は小学校にAETがいて、英語だけの授業も行っている。これは滝川特有ではないだろうか。市内全部の小学校にAETをおくことはできないので、他校からAETがいる学校に生徒をおくる交流事業なども検討中。

河野：今回滝川に出向いて会議を行っているのは、検討委員の方々に加えて、滝川の他の方々の率直な意見にも関心があるから。フロアや参加した方々、研修生受入れをしている方々のコメントもいただきたい。

平澤（とまと）：（研修生を受入れることは）迷惑ではないが、言語などの問題で戸惑いはある。

鈴木：マラウイ訪問に参加した理由は、私自身が滝川国際交流協会の個人会員になっており、JICAと市の協同事業であるこの機会に訪問しない手はないと思ったから。海外旅行はこれまでもしたことがあるが、マラウイのような発展途上国となるとこういった機会がないと目が向かない。訪問前にも不安はあったが、インターネットで情報収集をして準備した。帰国後は、マラウイに訪問した以上、市民への報告義務を感じる。本業が医療関係なので、マラウイの医療の現状について仲間内に報告したりして、巻き込むようにしたい。今後、受入れにあたっては、マラウイ訪問プロジェクト参加者とともに連携して協会に協力できる体制をつくっていきたい。

高谷：訪問先の情報の少なさは、現地に行ってからの言葉の壁よりももどかしいときがある。JICAからも受入れ側の教育や体制づくりなどに協力してほしい。

筧：　その面において、日本国民との協働はまだJICAにとって新しい取り組みなので足りてい

ない部分があるかもしれないが、意見をいただきながら取り組んでいきたい。

セッションⅠ「地域社会にとって国際協力を行う意義、メリットは何か」
(モデレーション：毛受)

毛受：あらためてプロジェクト説明をしたい。プロジェクトのタイトルにある「マルチアクター」とは、担い手をさす。対等な形での協力を指し、単なる「支援」ではない。いろいろな人を巻き込んで国際協力をしていくとよいのだが、なかなかうまくいかないのでうまくいっている例をとって学びあいたい。滝川がトップバッターである理由は、特定の団体だけではなく広い層が参加していることが分かりやすいから。一般的に「国際協力」に地域が関わることの必要性はまだ十分に認識されていないが、我々は国際協力活動を継続的なものにして日本に根ざしたものとしていくためにきわめて重要な要素だと考えている。

今後、この検討会は、パートナーシップや協働の難しさ、担い手のあり方や人材育成、市民参加の拡大などについて話あっていく予定です。

滝川のマラウイとの農業技術協力は、離農に対する危機感からだったという話だが、その危機感は通常必ずしも国際協力に結びつくわけではない。そのような方向になったのは、やはり市長や山内さんの経歴・経験によるものではないかと思われる。饗場さんのアンケート回答によると、徳島は地域としては「国際協力に対する関心がほとんどなかった」とのことですが、ニーズはあったと思われるか。

饗場：四国全体というよりも徳島の話として回答した。具体的な国際協力の活動はさほど多くない。地域全般に国際協力について関心が低いから、ニーズ自体が表面化しない。

毛受：では、今四国NGOネットワークに関わっている人々はニーズを掘り起こして巻き込んだのか。

饗場：四国NGOネットワークとして掘り起こすよりは、元々ある団体を活発化させて連携させた。まだ広く一般にニーズを発掘するような状況には至っていない。

毛受：地域で国際協力のニーズがあったわけではなく、地域の課題を国際協力に結びつけるアクターがいたから、活発になったものが多くある。長岡などは羽賀さんのような強力なアクターのいるまちだが、いかがだろうか。

羽賀：長岡は人口20万人中、2000人の外国人住民がいるが、日本人の住民の中には「外国人」というと自動的に「白人」となってしまう意識がある。それは市内在住の外国人の人権に対する意識の低さでもあるので危機感を感じている。「未来市民」である子どもの間に働きかけなければならない。人づくりをしない町は果ててしまうと考え、教育委員を引き受

けた。しかし、市内で内輪の交流をしていても公益性があるのかは疑問。新潟県は地理的な事情もあって3つに分断されているので、まずは新潟市内のNGOを県内他地域に広める必要がある。中越地震以降は、国籍だけではなく世代や障害などを含めた「多文化」についての訴えに耳を傾けてもらえるようになった。

三橋：前回の会合以降、上越市安塚地区のまちおこしに長岡の学生と取り組んでいる。3年間放置されていた田んぼを再生させるための田植えサークル。当初、「どうせ根をあげるだろう」と距離をもってみていた地元の人々も、地道に取り組む我々を見直して、自分たちの田の手入れも依頼してくれるようになり、少しずつ信頼関係が生まれてきている。

羽賀：そのようにコミュニティ活性化に関わっているアクターがめぐりめぐって国際協力に関わるようになる。

毛受：そもそも「国際協力」とは？

横田：ACTIONの12年間を通して学んだのは、日本社会にもフィリピン社会にも長短があるということ。フィリピン社会の良い点を日本の地元に還元するにはどうしたらよいか思案していた際、武蔵野市国際交流協会の教員ワークショップが始じまった。さいわい、武蔵野ではつながることができたが、国際協力NGOは外国コミュニティのニーズに目が向いているので、日本の地元のニーズを拾いにくい。

杉澤：事前アンケートについて。「国際協力」をどうとらえるかが課題だが、「地域」をどうとらえるのかも課題。自治体は行政区域で「地域」をとらえるが、NGOは活動しているエリアを地域ととらえる。国際交流協会はNGO型と自治体型の両立をする立場にあり、関心のある市民がテーマコミュニティをつくっていくためのコーディネーター役だと考えている。

自治体が行う事業では、「支援型」はあり得ない。税金を投入して行う以上は、地元に還元するものがある「循環型」の国際協力しかあり得ない。交流と支援と協力をもとに、「国際平和に寄与する町になっていくと思う。もとは地域の外国人の地元（出身地）に対する「支援」（例：スマトラ沖地震への募金等）などのように「他人事とは思えない」という突き動かされる想いを事業に移行していく術として協力事業になっていく。親近感から湧き出るこういう想いが原動力となる。

山西：杉澤さんのコメントは教育論にもつながる。学びは本来身近なところから当事者性を意識した教育。国際理解教育となると、課題、それに関わる人、「地域」となり、重層的なものである。また、自分の地域を考える時には、ほかの地域を見てみることが役立つ。

滝村：「地域」「協力」をどうとらえるかがきれいに整理されたが、そうはいいながらもODAも日本市民の税金であることを考慮すると「活動地域」「行政区域」を特定して議論を進める必要もあるのではないか。従来型の「支援」からなぜ今「市民主体」の議論に移行して

いるのか。行政機能の向上、good governance を達成しないことにはサービスも行きわたらない。それには市民社会を育てることから行政との良い関係を築くことが、効率的で有効な国際協力ができると考える。

横田：NGOでも寄付や助成を行う資金提供者に報告をする。しかし、そのフィードバッをしたところで止まってしまう。本来は、日本側のファンダーに報告して得た反応をさらにフィリピン側に伝えることがフィリピン側のエンパワーメントにもなると思っているので、そのような方向でやっていきたい。

毛受：情報が関係者の中で止まっていることがまだまだ多い。市民向けに発信する突破口をみつけることができればと思う。

河野：滝川の活動は協会主導とのことだったが、本当にそうだったのか。地域の活性化をうたうのであれば、その点を再度整理する必要があるのではないか。

山木：仕掛けたのは確かに事務局だったが、当初は地域では関心がないと言っても良いくらいだった。しかし、実施の過程で関わった農家や子どもたち、自分のような指導農業士にも慣れてきて、「英語で話そう」という意識がでてきており、今までにない動きになっている。仲間、家族、周囲を巻き込みたい。自分たちも何十年の間に他国の助けを得てきた。同じ農業者として助けたいと思う。

前田：農村だけでなく、一般市民にも広がりがあったことが成果とえいる。ただ経済的なことだけではなく、農家の自信にもつながるので、それも成果といえる。ただ、いわゆる「循環型」の協力のためには、まだ少し時間がかかると思われる。

饗場：滝川のケースは、定量的なデータがなくても意義があったということは推測できる。国際協力の活動は地域にとってメリットがあると断定してよいと思うし、それは地域の活性化ということなのだと思う。滝川などは「地域還元」が結果的にあったからよいが、実際の立ち上げ当初ははっきり予測できなかったと思うし、だからトップダウンで行った部分があるのだろう。そこで、我々として「こういう地域発の国際協力を始めるには一つにはトップダウンが必要条件です」とするのか、それは民主的ではないと考えるのか。

前田：当初はトップダウン。ただ、マラウイについては当初も反対はなかったので、それまでの協会の国際交流・協力活動に対する真摯な姿勢が信頼されてのことだと思っている。また、この類の活動には、活動を絞り込むためにも、市民の戸惑いを取り除くためにも、ある程度のトップダウンが必要だと考える。

高谷：教育委員会と協会が役所内の同じフロアにあった関係で、これまで協会を訪問した人は必ず学校を訪問してきた。機会をのがさずメディアなどでPRをして、市民の抵抗感を払拭する努力がいる。異業種交流がいる。

筧：　JICAで30年務めてきたが、どの団体やセクターにも得手不得手があると思う。JICAの得

意な面にばかり光があたってきたが、これまでの我々は国内の「被支援国を良くしたい」という思いを共有するのが不得手だった。組織としての限界もある。最終的には「人」だと思うので、それぞれの地域に根ざした協力にどのように寄与していくべきかを探っている。

杉澤：キーワードは「市民参加」。どのように市民参加を促すかは課題。滝川が盛り上がるのは、交流にとても力を入れてきているからではないだろうか。途上国のことを「他人事じゃない」と感じられる機会をどれだけつくるかにかかっていると思う。コーディネーターがどこまでそれをやるか。どこで誰がどうやるかを丁寧に決めていくのが重要。決めるプロセスに誰が参加するのかも重要で、そういう場をたくさんつくっていかなくてはならない。

毛受：滝川には、近所づきあいがあって、地元の方々同士の交流の場がすでにあるのが都会と違ってよい。マラウイサイドでは地域内のつながりはあるのか。農業者としての共有意識は農業コミュニティ内でもたれているのか。

山木：農協のような組合はあるが、あまりうまく機能していないかもしれない。

横田：フィリピンで、少数民族のお母さんたちの生活協同組合づくりのためにJICAから派遣されているJAスタッフがいて、現在、誰がどのように生協づくりをしていくのか検討するプロセスに、現地の人をどう巻き込んでいくかを考えている最中です。

毛受：地域の課題の解決に国際協力が役立つかもしれないし、国際協力活動の質を向上させるためにも地域を巻き込むことことが必要。今日はメンバーの多様なバックグラウンドを生かした有意義な議論ができた。

6月13日（月）会場：滝川ふれ愛の里「多目的研究室」

午前中、市内の国際協力に関連する施設訪問

(たきかわスカイパーク、手作りの家「とまと」、道の駅たきかわ)

セッションⅡ「地域レベルで行う国際協力活動の成果として何が考えられるか」

（モデレーション：河野）

毛受：機会を与えられれば活動を行う層があり、彼らにとっては自己発見等ある。「成果は？」と問うと難しいが、「関わって良かったことは？」と聞くと答えが返ってきたりする。

杉澤：（前夜にマラウイ訪問参加者の中村氏宅を訪問し、マラウイでのビデオなどを鑑賞し、意見交換をしたことを踏まえて）国際協力活動の「意義」をいくら力説しても仕方ない。会議の場で「ちゃんとした」話はできない、と思っている参加者がいた。「『メリット』は何か、なんて言われるとやりたくなくなる」と。中村氏との会話から得たコメントをいくつか共有したい。

1．参加した人の実感を伝えていくことが必要。

2．地域の関係性のなかで、参加してよかったことをどのようにを広めるか課題。マラウイ訪問に参加した人が地区に自分一人だった時は、周囲に自慢話ととられるおそれがあってなかなか周りに話せなかった。同じ地区の別の方に訪問して実感してもらうことで、今度は二人で一緒に周囲に良さを伝えやすくなった。

3．現場で体験したこと、考えついたことを対等な立場でうまく伝える意見交換の場があれば良いのではないか。

4．「滝川や自分はリンゴ栽培の専門家だが、現地にとってはマンゴー栽培の方が適している」と感じたので、現地にとってより良い形で協力したいという欲求はまだ解消されていない。

5．コミュニケーションが難しいことがフラストレーションにつながる。JOCVがすでに英語を教える取り組みをしているが、現地中学で日本語を教えてはどうか、という提案もあった。

山西：中村氏は、「現地にとって良いことをしているかというと、かえって参加した人とそうでない人との格差を生んでいるかもしれない」と言っていた。

青木：他にも中村氏の友人は「あまりに自分たちとの格差がありすぎて、何をどれだけ手伝えるのかが分からない」とも言っていた（加工をするにしても入れる容器やビンがない、等）。でも、グループができたのは良いことなのではないか。

筧：　中村氏たちにとっては、「支援」云々の話ではなく、行くことも行ってお金を落とすことも、すべてが結果的に「国際協力」なのではないか。

前田：仕掛けた側からすると、活動に「はまった」人が増えたのはメリット。マンゴーの方がよいのでは、との意見については、現在、マンゴーに接ぎ木をするなどの取り組みが始まっているので、これから点が大きくなっていくのではないか。

山内：確かに中村氏のコメントとおりJOCVの普及員が駐在していて、彼らの活動も参考にしていけるかもしれない。個人的に、化石燃料を使った農業がどこまで続くか疑問。マニュアル農業に切り替えて、日本側での技術の伝承のためにも国際協力は捨てがたい。

三橋：「手作りの家とまと」の平澤さんが「マラウイの農法を見て昔の自分たちを思い出す」とおっしゃっていたが、自分が田の再生に関わっている安塚でも似たことがあった。自分たちの取り組みをみて、地元の人々が「昔の自分たちを思い出す」と言っていた。日本のアイデンティティ再生に、国際協力も役立っているのではないだろうか。

羽賀：自然・文化・文明との線引きがしっかりしていないと、国際協力を行う際も「かわいそう」という気持ちが元になってしまう。国際協力は文化を見つめ直す良いチャンス。世代間（時間軸）、セクター間（空間軸）のつながりが文化力を表すと思う。文化力に基づいた国際協力。人を介することの意義がそこにある。

竹内：国際協力の意義は、言い方、とらえ方次第でいくらでもある。「持続可能な開発のための教育の10年」（ESD）的な要素もある。教育面が見えてくると、地域に根付かせる道が見えるのではないか。そういった意味で、遺伝資源センターなどはとても有効だと思う。

河野：手作りの家とまとがやってこれたのは、戦後すぐの生活改善運動があったから。でも、次世代を巻き込むにはどうしたらよいのか。「ヨコ」に活動を広げることも大事だが、「タテ」への働きかけも必要ではないか。

山内：とまとも視察受入れを多数行っているが、スペースの問題で多数の受入れは難しい。
また、参加資格として「農家の奥さん」という条件があるので、なかなかメンバーを増やすのが難しい。また、現メンバーは当初30万円の出資金を出しているので、それもネックなのかもしれない。

滝村：全国でも高齢化している。自宅の農業との両立はかなりのハードワークであり、嫁姑など家の中の関係調整を考慮して、それでもやりがいを感じるには、よほど活動に納得していないと難しいだろう。昔の生活改善運動を途上国のコミュニティづくりに役立つとして、JICAでも教材作りや調査研究が始まっているので、よければ参加してほしい。

河野：滝川での国際協力活動の「効果」について。参加農家100戸、マラウイ訪問者28名、1年の3分の1は市内に研修生がいる、協会の会員数増加、という4点が昨日の発表では挙げげられていたと思うが、他には何かあるか。

山内：参加者へのアンケート調査をこれまで実施していないので、これからやっていきたいと思う。
報告会・送別会は100名ほどの参加者を得ている。「地域づくりの達人」といわれる水口

さんが他の新しい農家とつないでくれている。また、過去は総会後の交流の参加者は30名程度だったが、現在は70名ほどが参加するようになった。国際交流関係者以外にも輪が広がっている。学校もアクターとして巻き込みたいが、教員個人の思いがないと継続が難しい。

杉澤：滝川の国際交流、協力事業は多岐にわたっているが、各事業が乖離しているようにみえる。

伝えるもの、技術はあるが、それを伝えるには人を介さないといけない。マラウイからの研修員とふれあった人は「マラウイ人」「黒人」というだけではなく、名前も分かるような付き合いにまで近づけたらよいと思う。先ほどの日本語教室の案もコミュニケーションツールとして有効ではないか。また、現地のマンゴージャムを滝川で売ることを目標に、「売れる物」をつくる過程にもさらに協力できるのではないか。素材がたくさんあると思う。

河野：千葉の富浦の道の駅の事例。タイのカウンターパートの物産を千葉で販売している。実益もあるし、コミュニティ同士のつながりも深まるのでは。

竹内：姉妹校提携。行政パンフレットにも載せるとよいのではないか。

山内：姉妹提携は今後の「縛り」になりえることを考えると、なかなか踏み切れずにいる。

河野：これまで試してうまくいったり、いかなかったりという事例はあるのか。

山内：冬の仕事としてマラウイにいかないか、と当初は考えていたが費用と効果が難しい。半年間住み込みで農業者を連れてきて、一緒に作業をするのは、JICA枠では難しいのか。

筧・滝村：草の根の枠を使えば問題ないはず。

山内：農業から広がって生活が向上すれば成功事例になるなどの展望はある。点同士をつないでいかなくてはならない。

筧：　ペルー事務所にいた際、実績を積み上げていくこともアピールにつながることを学んだ。現在はバラバラにみえる滝川の点もつながると確信している。

横田：マラウイでの協力の相手先も広げてはどうか。フィリピンでは、孤児院で自給自足用の畑があるが、うまく機能していない。もしマラウイにもそのようなケースがあれば、そこと協働しても格差は生まれないし、効果も見えやすいので、そのような開拓もしてはどうだろうか。

杉澤：中村さんのジレンマは、現地で嫉妬心や貧富の差を生んでいて、良いか悪いか判断できないでいること。どのように現地を見て入っていくか、こちらから見た「支援」ではなく「協力」にしていくか、地域ならではの、というのは人と人とのつながりなので、そこを生かしたい。

山内：研修員同士の嫉妬があるのは事実。滝川で研修を受けた人々は「普及員」として戻るが、

農業技術だけではなく、日本についての理解も普及してもらうようにしたい。研修事後の連絡としては、あちらのインターネット環境がよくない場合があるが、市民同士で直接手紙をやりとりしていることもある。ただ、まだ事後対応は対策の余地があると思っている。

現地の他のアクターとして國學院短大にも働きかけたいが、所属の学生が基本的に2年間しかいないことと、教員陣の関心の低さからつなぎあぐねている。高校とは良い関係。

滝村：短大も、学生単位でみると2年間という期限があるが、大学全体をアクターとしてとらえると対応できるのではないか。

山内：もう一つの取り組みとして、スタディツアーに16歳～20歳までを対象とした半額補助枠をつくった。

横田：高校生を対象にすると、親を巻き込めるので期待できる。

饗場・竹内：旅行社などの企業を巻き込むのも一案。活動のいろいろな部分に、人の目を引くセンスのよさ、かっこよさ、という要素も意味がある。

羽賀：駅前の空きビルを再利用するのはどうか。

山内：資金的に難ありかもしれない。現在、市から95万、会費収入が240万、総額で2000～3000万円規模。

新田：市街地活性として駅前の建物などは無償提供してもらってはどうか。

羽賀：その際のスペース活用法として、例えば長岡では市民が自立プロジェクトをできるようにパネルを貸しているが、そうすることで通りすがりの人も入ってくる。

横田：ACTIONでも学生に「金は出すけど口は出さない」という方式で企画を立てる機会を与えているが、彼らは身近なものから案を出すので、結果的には一万円を超える企画が上がってきたことは過去に一度もない。

滝村：中村さんのように国際協力に「はまって」はいながらも、ジレンマを抱えている過去の参加者とのギャップを埋めていく必要を感じる。そうすることで、点が面になっていく動きがみえる。ただ、その先に本当に町の活性化があるのかは考える必要があるのではないか。

河野：「成果」をどのような尺度と目線で図ればよいだろうか。

前田：我々の勢いに逆行して、強いやる気のなさ、元気のなさを社会に感じる。これまでは2～3年のスパンでしかものを考えてこなかったが、マラウイを通して、長期スパンで考え、人材育成にも取り組みたい。

毛受：「活性化」を行政が打ち出すには、精神面ではなく、ある程度数値化したもの（経済面効果など）を出さないと予算の確保がむずかしい。

前田：技術研究都市を目指してはいる。マラウイの研修も各施設があったからこそなので、それ

らも有機的につないでいきたい。

山内：滝川は気候が安定しているから、花野菜センターと遺伝資源センターという２つの施設が一箇所にあるのはここだけ。技術研究都市のステイタスがあると、国際協力以外のコンベンションが入る余地もないではない。

セッションⅢ「地域で国際協力を行う上での課題は何か」、まとめ

（モデレーション：）

毛受：活発に活動していても課題もあることがわかった。各自アンケートについてお話いただきたい。滝川は担当者が山内さんだったからうまくいったが、自治体スタッフでこれだけ広く地域で顔が知られているのはまれ。羽賀さんもうまく地域で連携なさっているが、自治体職員と市民との関係についてどう思うか。

羽賀：長岡は1％程度しか「国際的」な活動に関心がないと思う。また、人々も「住民」という意識が強く、行政に対しても「お上」意識がある。これを「市民」としての意識に変えていくことが国際協力のエンジンになると考える。ただし、誰かが強いリーダーシップを発揮して引っ張りすぎると、引っ張られる人々がモノを言わなくなる危険性があるので、気をつける必要がある。これらの動きが廃れかけた文化の再生、地域のアイデンティティ復活につながると思う。また、長岡には市外から来ている人材がいるが、地域にとけ込みにくいため疎外感を感じていたりする。しかし、国際交流・協力はそういった人々にとっても関わりやすい。地域活性にあたっては、よそ者の目も大事なので活用されるべき。

毛受：地域の人々の潜在力をいかに引き出すかだろう。新田さんは市民を巻き込んだ取り組みをうまくなさっているがどうか。

新田：特に「国際協力」と意識をしないで誰でも入ってくることができる店構えにしてある。しかし、一歩店内に踏み込むと国際協力の玄関なので、例えば会計の際に「このお買い上げがカンボジアでの学校建設に役立ちます」など、声をかけて実感をもってもらうようにしている。

毛受：大々的に国際協力の枠を全面に出さないで、敷居を低くする戦略として有効かと思う。

竹内：小学校・中学校・高校・大学の間の連携がまだないが、愛媛大でNGO講座をやることで教育の場に持ち込み始めた。彼らにとって道ができ始めた。学校という人生で誰もが通っていく道のなかに国際協力に関する教育を取り入れて視点をつくることで、地域づくりについても考えてもらえるようになってほしい。

毛受：若い層を巻き込むにはどうするべきか。特に学生と多く接している横田さんから伺いたい。

横田：具体的に何をやるかではなく、やりがいや何か責任あることを任せてもらうことを学生は

求めているので、それをどのようにして提供するか。自分の知る限りでは都内で関心のない人がふらっと入ることのできる構えのNGOはない。「市民」といっても会員。学生でも異分野の人をつないできたり（Eg.美容師）して意欲を見せるので、それを「やっていいよ」と受入れて、関心があり意欲のある学生を通して学生仲間にも広めてもらう。そして、その動きを現地にフィードバックをしていくことも重要である。

毛受：杉澤さんのところでも学生をつないで広げているが、どのようにやっているのか。

杉澤：広げ方の切り口を考え直す必要がある。青年のための国際理解講座ワークショップでは、実行委員も学生が務めているが、そのような「マジメ」な話をする場が大学にはないとのことで、このワークショップに取り組むことにも意欲的に関わってくれる。そういう場をつくっていくことが必要であろう。小中高等学校の国際理解教育で、将来関わってくれる人材にも大きく網をかけていく。

横田：近年はMIAの国際フェスティバルでは、いわゆる個別のNGO宣伝ではなく、協働で地域を知ってもらおうという取り組みとして国際協力以外の活動をしているNPOを混ぜている。

杉澤：最初は在住外国人によるフードストールなどをいれて「武蔵境に来たらおいしいよ！」とうたった。そこからブレイクし、地球屋台村や遊びのブースを作くるなど発展してきている。

彼らが企画。親子連れが各ブースを訪れスタッフとのやりとりなしでは答えられないようなクイズを掲示して、クイズラリーをすることで、各NGOスタッフと参加者の会話の場をつくっている。関心を引くための賞品も良いものが揃った。

滝村：今伺っている事例は、国際協力を日常化させていく入口戦略としてはよいが、そこから主体的に担い手になっていくかどうかも議論の必要があるのではないか。

山西：教育で質を向上し、学びを深める。地域づくりにおいて人が出会うところでダイナミックな学びが生まれ、循環していく。地域の中での学びづくりと相手国でどのように学びが循環していくかを考える必要がある。

滝村：一つの出会いの場として、市民にどのように委ねていくか。

横田：その委ね方によって、やりがいを持ってもらえたりもらえなかったりする。小学校での取り組みでは、子どもが自ら気づいて協力の必要性を感じるようにしかけたりする。例えば、バスケットボールをしている際にフィリピンの生活を見せて、自分たちの日常との違いに疑問を感じるところからスタートし、その違いの原因を知るにつれて「何かしたい」という感覚を覚えるようになる。

毛受：そういった取り組みは有効。ただ、フォローも大変だろう。

羽賀：子どもたちは自分の発意で調べモノをしたり文化祭に向けたリサーチや展示をしたりして

いる。そのなかで、国際協力の道で生きていきたいと感じるようになることもある。そういった自発的な思いをいかに我々が受けとめたり、ヒントを与えるかが重要。また、子どもや若いうちから違った人々と接してコミュニティをさせることで、コミュニティができていく。

杉澤：同じ市民参加者でも個々によって受け取り方が違うので、バトンのわたし方のプロセスでコーディネーターが役に立つ。

鈴木：あくまで私見だが、農作業が極めて機械化されている滝川の農家にマラウイから来たり、食糧事情の悪いところで生産の効率アップを教えても、それらの知識を活用するベースが社会にまだない。教育水準を上げることで、指導を受けるベースをつくることが大事。衛生観念などの概念を指導側と受け手側でマッチさせる必要がある。

毛受：議論の途中だが、退席する方々がいらっしゃるので、次回の日程を決めておきたい。次回は高松で8月8（月）・9日（火）で決定としたい。（羽賀・横田は海外出張のため欠席）その次は11月前半に長岡で調整をする。（11/12は武蔵野まつりのため、武蔵野メンバーにとって難あり）議論の続きだが、一般市民をどのように惹きつけていくか。財源の問題もある。

河野：滝川での担い手について伺いたい。今回研修生の受入れをした方々も当初は「頼まれたから引き受けた」というスタンスだったようだが、とは言っても、ただ誰にでも頼むわけではないと察する。どういった基準で受入れ依頼をしているのか。つまり、どのようにして、そういうことを引き受ける人材を発掘されているのか伺いたい。

前田：第一条件として農業のプロであること。それからはこれまでの付き合いや、そこから発展して紹介してくれた方々が主。

山内：スタッフの人脈、JA、役所、他の小さな加工所など、人づてが大半。

前田：短大との付き合いやメディア使いが課題。人口比でも若者は少ないが、関心はあると思うので、うまくひろいたい。

毛受：予算の面での課題はどうか。

饗場：第三者への説明のために、国際協力の事業の評価を数値化することは有効。何に効果があったか目に見える形の数字があることで、外部から資金を得る際も説得力も高まる。JICAが使う評価を簡略化したものを地域で使ってはどうか。

滝村：会計アカウンタビリティ、プロジェクト・サイクル・マネジメントのプロジェクトなどもある。ご参考までに。

杉澤：毎年予算が5％ずつカットされていく。「売れるもの」かどうかがファンドレイジングにおいては重要。滝川では、人口4万人のうち400名が会員ということは、市民の1％が会費を支払う価値があると評価しているということで、「すごい」ことと言える。

山内：合併協議の際のアンケート（回収率57％）で国際都市振興の評価が高かったので有り難い。先般EUを訪問した際、国連系の組織の資金を使って活動している事例があったが、こういった財源は期待してよいものなのか、それとも、日本は日本のパイで活動するべきなのか。

河野：国連が出す資金はヒモ付きで上乗せされていることがあるので、その上乗せ分を使っている例かもしれない。日本でもやってよいと思うが、自治体での活動に使われた例は聞いたことがない。

毛受：できないことはないだろうが、自治体側にその類の資金を使おうという意識や器がないのではないだろうか。

杉澤：補助金は打ち切られると終わってしまうので、続けたい事業補助金頼みでは辛い。

竹内：ノウハウ。JICAなどの使えるスキームとプロジェクトをつなぐことができるほどNGO側が周知していない。そこの情報共有を強化する必要がある。四国では、四国NGOネットワーク、JICA、自治体等との連携を見えやすくしようと取り組んでいる。

毛受：セカンドハンドなどはファンドレイジングや異業種との連携がうまくいっているように見受けるが、どうか。

新田：セカンドハンドでは資金には困っていない。自主財源があるのは強みだと思う。NGOは事業だととらえて、経営力や「使える人」を見抜く力を含めた営業力が必要。ニュースレターは5000部刷って4500部は郵送している。経費はかかるが、我々の活動をしっかり報告していて信頼を蓄積してきているからか、チャリティーショップの売り上げが伸び悩んでも寄付は増えている。

横田：ACTIONでは現在、フィリピンの富裕層からの資金を現地で循環させるべく、現地メディアなどを使って取り組んでいる。フィリピンの中でお金が回り、コミュニティが自立するように現地コーディネーターとして動くことも外国NGOの重要な役割だと考えている。

毛受：残念ながらもう時間がない。今回は、次回につながる非常に有意義な議論ができました。次回以降も今回同様事前にみなさんの意識を共有するためのアンケートをとらせていただきたい。

ありがとうございました。

「マルチアクター参加による市民間協力推進プロジェクト」第三回検討会

議　事　録

2005年8月8日（月）～9日（火）

於　香川県高松市

プログラム

8月8日（月）会場：サンポートホール高松ホール棟5階［55会議室］

15:00～15:10　開会挨拶および自己紹介

15:10～16:00　四国NGOネットワーク活動紹介

竹内よし子（四国NGOネットワーク代表、えひめグローバルネットワーク代表）

16:00～16:30　質疑応答

16:30～16:45　休憩

16:45～17:30　NPO法人セカンドハンド活動紹介

新田恭子（NPO法人セカンドハンド代表、四国NGOネットワーク副代表）

17:30～18:00　質疑応答

8月9日（火）　会場：サンポートホール高松ホール棟5階「55会議室」

9:00～11:00　NPO法人セカンドハンド関連施設訪問

11:00～12:30　セッションⅠ「ネットワークを成功させるには」

12:30～13:30　各自昼食

13:30～15:00　セッションⅡ「パートナーシップ（協働）のあり方と課題」、まとめ

参　加　者

*印は初日のみ参加

検討委員

【北海道滝川市】

高谷富士雄（たかや　ふじお）　たきかわ農業協同組合参事、滝川市教育委員会委員
社団法人滝川国際交流協会理事

山内康裕（やまうち　やすひろ）　社団法人滝川国際交流協会事務局次長

【新潟県長岡市】

栄隆士（さかえ　たかし）　長岡技術科学大学留学生センター教授

【東京都武蔵野市】

杉澤経子（すぎさわ　みちこ）	武蔵野市国際交流協会プログラム・コーディネーター
山西優二（やまにし　ゆうじ）	早稲田大学文学部教授

【四国】

栗田英幸（くりた　ひでゆき）	愛媛大学法文学部助教授　国際開発論／市場経済論
竹内よし子（たけうち　よしこ）	NPO法人えひめグローバルネットワーク代表
	四国NGOネットワーク代表
新田恭子（にった　やすこ）	NPO法人セカンドハンド代表
	四国NGOネットワーク副代表

リソースパーソン

大山育江（おおやま　いくえ）	大山牧場職員
山下淳二（やました　じゅんじ）	四国新聞社編集局長

コーディネーター

河野善彦（こうの　よしひこ）	JICA国際協力客員専門員、笹川平和財団参与
毛受敏浩（めんじゅ　としひろ）	財団法人日本国際交流センター
	チーフ・プログラム・オフィサー

【独立行政法人 国際協力機構（JICA）】

山口公章（やまぐち　きみあき）	JICA東京国際センター所長
松尾沢子（まつお　さわこ）	JICA国内事業部市民参加協力室連携促進チーム職員
青木　公（あおき　ひろし）	JICA東京国際協力サポーター（オブザーバー）

＜JICA四国＞

松谷広志	JICA四国支部長
染井耕一	チーム長
磯辺良介	職員
山本高弘	市民参加協力調整員
松村幸江	国際協力推進員
渡辺真理	国際協力推進員
池田幸恵	国際協力推進員、四国NGOネットワーク会員

吉田紀代美	派遣職員
三原可南子	インターン

【事務局】

滝村卓司（たきむら　たくじ）	JICA東京連携促進グループ計画・管理チーム職員
森田慈子（もりた　しげこ）	財団法人日本国際交流センタープログラム・アシスタント

オブザーバー

饗場和彦（あいば　かずひこ）	徳島大学総合科学部助教授、四国NGOネットワーク運営委員
上田勝久（うえだ　かつひさ）*	内蒙古愛陽教育経済支援協会会長 四国NGOネットワーク運営委員（徳島）
斉藤慎吾（さいとう　しんご）	四国エイズプロジェクト　海外事業担当 四国NGOネットワーク運営委員（愛媛）
吉川浩史（よしかわ　ひろふみ）	くろしお農業振興協同組合代表理事 四国NGOネットワーク運営委員代理（高知）
澤部涼子（さわべ　りょうこ）*	徳島大学学生
三輪北斗（みわ　ほくと）*	徳島大学学生
篠崎麻美子（しのざき　まみこ）*	愛媛大学学生
下窪日登美（しもくぼ　ひとみ）*	愛媛大学学生
服部美樹子（はっとり　みきこ）*	愛媛大学学生
柳井洋子（やない　ようこ）*	愛媛大学学生
門田啓吾（かどた　けいご）*	愛媛大学学生、四国NGOネットワークボランティア
林知美（はやし　ともみ）*	愛媛大学学生、四国NGOネットワークボランティア

＜国際課、交流協会関係者＞

野口利浩*	徳島県国際交流協会　国際交流・協力担当嘱託員
宇都宮桂*	香川県国際課　主任
吉井寿美子*	香川県国際交流協会　事業課長代理
杉野将行*	愛媛県国際交流課　主任
八塚優子*	愛媛県国際交流協会　主事
石田嗣朗*	高知県国際交流課　主任

「マルチアクター参加による市民間協力推進プロジェクト」第四回検討会

議　事　録

2005年11月13日（日）～14日（月）

於　新潟県長岡市

プログラム

11月13日（日）会場：ながおか市民センター1階　長岡市国際交流センター地球広場

14:30～14:50　開会挨拶および自己紹介

14:50～16:20　長岡市における活動紹介

羽賀友信（長岡市国際交流センター地球広場センター長）

オーガスティン・アウニ（長岡造形大学非常勤講師）

五十嵐豊（長岡市山古志支所産業課商工観光係長）

斉藤隆（長岡市教育委員会山古志分室長）

宮島昌弥（長岡大手高校3年生）

関龍（長岡高校2年生）

日沖七瀬（長岡高校2年生）

竹内公英（長岡技術科学大学生）

ジャヤンパット（新潟工科大学3年生）

上川路文哉

16:20～16:50　質疑応答

16:50～17:00　休憩

17:00～18:30　セッションⅠ「国際協力の担い手の求められる資質」

11月14日（月）会場：ながおか市民センター　2階202号室、203号室

9:00～10:45　セッションⅡ「地域で担い手が活動できるための環境」

10:45～11:00　休憩

11:00～12:45　セッションⅢ「次世代の育成と地域への広がり」まとめと連絡事項

12:45～15:30　山古志地区訪問

参　加　者

検討委員

【北海道滝川市】

高谷富士雄（たかや　ふじお）	たきかわ農業協同組合参事、滝川市教育委員会委員 社団法人滝川国際交流協会理事
前田康吉（まえだ　こうきち）	社団法人滝川国際交流協会会長
山内康裕（やまうち　やすひろ）	社団法人滝川国際交流協会事務局次長

【新潟県長岡市】

羽賀友信（はが　とものぶ）	長岡市国際交流センター地球広場センター長
三橋栄治（みつはし　えいじ）	ドラミックス代表

【東京都武蔵野市】

杉澤経子（すぎさわ　みちこ）	武蔵野市国際交流協会プログラム・コーディネーター
山西優二（やまにし　ゆうじ）	早稲田大学文学部教授
横田宗（よこた　はじめ）	NPO法人ACTION代表

【四国】

饗場和彦（あいば　かずひこ）	徳島大学総合科学部助教授、四国NGOネットワーク運営委員
竹内よし子（たけうち　よしこ）	NPO法人えひめグローバルネットワーク代表 四国NGOネットワーク代表
新田恭子（にった　やすこ）	NPO法人セカンドハンド代表 四国NGOネットワーク副代表

リソース・パーソン

オーガスティン・アウニ	長岡造形大学非常勤講師
五十嵐豊（いがらし　ゆたか）	長岡市山古志支所産業課商工観光係長
斉藤隆（さいとう　たかし）	長岡市教育委員会山古志分室長
上川路文哉（かみかわじ　ふみや）	
竹内公英（たけうち　きみひで）	長岡技術科学大学生
宮島昌弥（みやじま　まさや）	長岡大手高校3年生
関龍（せき　とおる）	長岡高校2年生
日沖七瀬（ひおき　ななせ）	長岡高校2年生
ジャヤンパット	新潟工科大学3年生

ゲスト（11月13日）

長島忠美（ながしま　ただよし）	衆議院議員（前山古志村村長）
森　民夫（もり　たみお）	長岡市長

コーディネーター

河野善彦（こうの　よしひこ）	JICA国際協力客員専門員、笹川平和財団常務理事
毛受敏浩（めんじゅ　としひろ）	財団法人日本国際交流センター　チーフ・プログラム・オフィサー

【独立行政法人 国際協力機構（JICA）】

筧　克彦（かけい　かつひこ）	JICA東京国際センター次長
滝村卓司（たきむら　たくじ）	JICA東京連携促進グループ計画・管理チーム職員（事務局）

【財団法人 日本国際交流センター】

森田慈子（もりた　しげこ）	プログラム・アシスタント（事務局）

オブザーバー

神林茂（かんばやし　しげる）	長岡市企画部長
腮尾賢一（あぎお　けんいち）	長岡市企画部国際文化課　課長補佐
丸山秀夫（まるやま　ひでお）	長岡市国際交流センター地球広場　総括副主幹
西山裕介（にしやま　ゆうすけ）	長岡市企画部国際文化課国際交流班　長岡市国際交流センター
矢沢康子（やざわ　やすこ）	長岡市国際文化課長
橘みつひろ（たちばな　みつひろ）	にいがたNGOネットワーク、ながおかNGO悠志の会理事
木戸正巳（きど　まさみ）	JICA国内事業部市民参加協力室青年招へいチーム
青木　公（あおき　ひろし）	JICA東京国際協力サポーター
猪熊陽子（いくま　ようこ）	国際協力推進員、JICA長岡デスク
柄沢友里（からさわ　ゆり）	国際協力推進員、JICA新潟デスク

●11月13日（日）会場：ながおか市民センター1階長岡市国際交流センター地球広場

羽賀：今日は、長島氏を衆議院議員としてではなく、元山古志村村長としてお迎えした。

森：　この市民センターは自慢の場所。当選当時、国際交流を浸透させたくて、また、特に中高校生に来て欲しくてあえて市の中心部の目抜き通りに設立した。現在は若い中高校生のたまり場になりつつあり、青少年の心の成長の場となっているといえる。立地が良いばかりではなく、市民も市外の方々も、多くの協力を得ているからこその場である。

長島：構えないで、普通にいろいろな人と知りたい。山古志では、留学生に田植えをしてもらったり、インド―パキスタンやイスラエル―パレスチナ交流をしてもらったりしている。

長岡市における活動紹介

羽賀：この地球広場は5年前に異質な情報・人を一元化された場所に集めるためにできた。

「国際」に関心があっても「協力」に関心をもっていくのは至難の業。

リソースパーソンとしてお二人迎えている旧山古志村は錦鯉の産地として国際的に有名であり、交流も盛ん。アウニさんは、戦後に日本が資源もないのに、教育で立ち直ったことに関心を持ち、来日した。特に長岡の「米百俵」の精神に関心が高くてここに拠点を置いていらっしゃる。上川路さんは、まさにマルチアクター。マルチアクター同志が出会った高校生たちを東京に連れて行ったりしてくれている。橘さんは、協力隊OBとしてマルチのネットワークを持っている。

・異質な人たち（場）、異質な世代（時間）の両方の広がりが必要。

・若者に対しては、「子供」ではなく、「未来市民」というとらえ方。

・人的資源と文化的資源が出会うと１．国・国際協力　２．まちおこしが促進される。まちが整備されない限り国際協力はありえない。

坂の上小学校で行われたピーストークマラソンでは、150名がこの場でボランティアとして働いた。

・参加している人が参加できるという自分のポテンシャルに気付くことが大事

・異質な人がいろいろなダイナミズムをうめる場所

・1日940名が使用

・高校生達も、学校や学年が違っても、ここでは同じように交流できる。

五十嵐：ボランティア・国際協力・国際交流をしているという感覚はない。いろいろやっていたらたまたまいろいろな人に出会った。村長がいろいろ引き受ける。

・10万円の予算で交流員に来てもらおうということになり、最初はフランス人、二人目以後は新潟大学留学生センターの「山古志プログラム」としてロシア人、ネパール人、モン

ゴル人が来ている。決まったプログラムはなく、来てもらってからその国の文化を知り、共有し合うようにしている。

・まずやってみる、受入れてみる、という姿勢。

・身の丈にあったことしかできないので、日本人かどうかではなく、できることは受入れる。

・ニシキゴイが国際的に通用する言葉になっている。過疎なので来てくれる人がいれば歓迎する。

・その場でないと経験できないこと（eg.牛に触れる、鮭に触れる）があるので、一度来てみてほしい。

上川路：いろいろなところに声をかけて聞きこみ、温かい目で見守ってくれる大人、団体に応援してもらってきた。都会では「無鉄砲」として応援（お金、場）がもらえないが、JICA、山古志が支えてくれた。

例）

・祭りにイスラエル―パレスチナの学生が参加し、御輿を担いだ。

・地元の人々はリラックスして、イスラエルかパレスチナかという分け隔てなく受入れてくれた。

・中越地震の際は、学生を集めて行った。

・若者は時間がある。無鉄砲ながら行動力を発揮できるのは目線を合わせて話してくれる大人のおかげです。

羽賀：コミュニティのきずなが強いというのは、排他性が強いことも意味する。でも、そのなかでも「来い」と言う懐の深い人々がいるのは重要なこと。

アウニ：・本来は、「地球広場」という前に「日本広場」があるべき。「米百俵」の文化など、日本のことをきちんと知って欲しい。

・NPO-EDO（Education Development Organization）をつくったきっかけは、無知こそ人類の最大の敵だと考えるから。また、江戸時代こそ日本の黄金時代と考えていることもこの名前にした理由の一つ。戦争も無知から起こったと思う。

・「無知」を防止しないと自立した判断力を持つことができない。「社会人」は働きだしたらなるというものではなく、本来生まれた時からすでになっているもの。他国の戦争について考える前に、15分に1人自殺している日本はどういう状況にあるのか先に考えてほしい。

・HIV・マラリア・結核・鳥インフルエンザなどの感染症対策に今使われている軍事費を充てたら、どれだけ効果的だろうと思う。

・野口英世はガーナでワクチン研究をしていたが、そのおかげで自分は今生きている。何

か日本に恩返しがしたいと思っている。

・関連性がないと事業は続かない。関連性を見い出せるかどうか。応用ができることが重要。これまでの日本にはノウハウはあったけど“know why”がなかった。NPO-EDOでは、長岡の小学生をガーナに連れて行く際、ビザの手配等も一緒に行うなど、“know why”の機会づくりにも取り組む。

・“Educated”な日本人をつくりたい。

羽賀：「かわいそう」「物あげ大会」じゃない視点としてアウニさんをお招きしたが、まさにそのとおりのお話だったと思う。

関：　市民センターで印象に残った活動は、今年三島町で受入れをしたイスラエル―パレスチナ日本学生会議。

・これまで中東問題は他人事だったが身近に感じるようになった。

・この土地を生かしてできることがあると気づいた。

・フォートワース（姉妹都市）から戻って長岡でできることがあることに気付いた。

・長岡から世界へ発信したい。「米百俵」を自分たちなりに消化して、新しい価値を与えたい。

宮島：フォートワースに2年前に行って市民センターを知った。「仲間」がいて学校より楽しい。やりたいことをサポートしてくれる大人がいる。

・シャプラニールとの共同プロジェクトを行った。

・地震後最初の歩行者天国で老若男女できて、国籍を問わないマツケンサンバを踊った。参加者が明るくなった実感がある。

・特別な高校生活を過ごしたと思う。高校を出て離れてもアイデンティティとしてこの経験を持ち続けたい。

日沖：中学一年生の時に9.11があった。生きた情報、価値観を市民センター・羽賀さん経由のアフガン事業を通して得た。漠然とした世界への憧れが現実的になっていくのを実感している。違いを受入れることから世界を考えられると気付いたら、家族や自分を見つめ直すことができた。

竹内：これからやりたいこと。模擬国連は内輪のこととして始まっているため、大学内での知名度も低いが、受け継いだ者として知名度を上げていきたい。高校生、一般市民も巻き込みたい。AFS名古屋で活動していたが、今年長岡技術科学大学に編入した。長岡では高校生が主体的に活動していると知って感銘を受けた。企業が留学や国際協力に協力的な点も「すごい」ことだと思う。

羽賀：地域性を生かした協力をしていきたい。自己目標はつくりやすいが「社会目標」をつくる場を提供できているのは有意義だと思う。

（質疑応答）

河野：まとめて質問を受けたい。

毛受：企業とのパートナーシップはどれぐらいあるのか。

羽賀：まだ多くはないが、地元スーパーマーケットが生徒の派遣費用を全面出資してくれている。地元の活性化が「同心円」で世界に広がっている。マルチアクターとなるのは、コンセプト化できるスーパーバイザーがいてコーディネーターがいるからこそ。この両者は別々にいる必要があり、一人が両役をかねてはうまく機能しない。

饗場：コンセプト化する作業自体は羽賀さんや杉澤さんのような個人が行い、コーディネートするのは別の人、という考えか。

羽賀：いろいろあるコンセプトを一元化して、どういうことが可能かをさらに投げ返す役割が別途要る。

饗場：まずはコンセプト化できる個人の存在が必要といえるのだろう。

杉澤：2つ質問がある。1. 具体的に「長岡の文化」とは？2. 学校の友達はみなさんのことをどう考えているか

高谷：3つ目に身内はどう考えているかということも加えたい。

山西：4. 関さんがおっしゃっていた「新しい米百俵」とは？

日沖：1. 地域の人々のつながりが深い。それもあって災害も乗り越えた。

2.「がんばっているね」協力的な友人も多い。「自分だけじゃない」と感じる。

3. 学業との両立も大事だが、受け入れていると思う。

関：　2. 自分では「変人」と思っている。行動してきたからマイナスがプラスになってきた。

4. 文化を歴史から学んで知るだけではなくて伝えていきたい。「歴史をつくっていく」ような視点。まだ具体的ではないが・・・

3.（親）父が三島町でまちおこししているので「親」として接するのではなく、自分の意見をきいてくれる。

宮島：1. 人と人のつながり。地域力。

2.「人とちょっと違うこと考えている」「先を考えて行動している」

3. 勉強との両立について温かく見てくれる。

山本：1. 外の人間を受け入れる。

2. 変人、校内新聞などでセンターを紹介しているが反応はうすい。

竹内：1. 技科大だと大学しかみえないし、長岡市内にはなかなか来ないので、はっきり言えないが、大家さんとはいつも「話せる」。出身の愛知でも隣近所との付き合いはこれほど蜜ではなかった。

2. 大学なので気の合った人にしか会わないので、特になにも言われない。

3. 父母はAFSでの留学当初は反対していたが今は何も言わない。

饗場：「米百俵」の話を正確にもう一度説明してほしい。

アウニ：「米百俵」の精神は　1. 平和　2. 人材育成　3. 先見の明　4. 他人とのアイデア交換　5. 違いがあって当然、バラバラであってもまとまるとハーモニーになる、という考え方。四次元で考える。目先のことだけでなく、行動を起こすとどうなるかを見ることのできる人を育てる。物の量だけの問題ではなく、今あるものをどう使うか、「正しい」と「優しい」の使い分け。

羽賀：130年前、長岡が震災でつぶれたときに姉妹藩から米を百俵もらった。でも、その場合で食べるのではなく、人材育成に使った。「ごうぎ」な人を育てる「変わってるけどモノになるね」という意味。

河野：長岡では歴史的風土で活動についても説明がつくが、他地域はどうなる？

羽賀：今のは文化論。アウニさんも子どもたちも当センターができるまでは、よそでやっていた。

ここでスーパーバイズできて、つなげて活動に変えていけるようになったから活動が活発になっている。

山内：1.（高校生たちに）先進国の一都市であるフォートワースに行ったのに、国際協力に向かったのはなぜ？2. 山古志の地域の人たちがどういう風に活力を生みだしているか。

日沖：最初は「世界を見てみたい」という思いだけ。でも、地球の違うところに住んでいるといっても友達なのだと気付いた。その後、市民センターで「難民」という枠でくくられていたアリジャンさんに出会って「何も自分と違わないではないか」と気付く機会があったから。

関：　市民センターを知った。「アメリカ＝世界の最先端」と思っていたが環境問題について話し合っていた際に、アメリカでの意識の低さに気がついた。「これでいいのか？」と疑問を持った。

宮島：最初は興味本位。フォートワースプログラム卒業生のつながりと出会いがあったから。

その後、トリア（友好都市）でゴミ分別教育の徹底ぶりなどにも気付くことができた。

山本：帰国後にセンターがなければ気付いてきたことを実現したり考えたりする機会はなかった。

斉藤：「みんなで楽しんでやろうよ」という感覚であって苦ではない。山古志の人か、ヨソの人かという感覚ではつきあっていない。

アウニ：国際協力の根底にある間違いは「貧乏な国」「金持ちの国」の区別。各国に貧乏な人、金持ちな人がいる。国ではなく人と人の区別に基づいて行った方がよい。

饗場：「山古志では楽しんでいる」というが、国際協力・交流は経済的にも人的にもコストがかかる。そうしたコストを自分たちのためではなく部外者のために費やすことが本当に「楽しい」と受け止められているのか。

五十嵐：最初は役所主体でイベントとしてやっていたが、担当が代わってから、村民がイベントに来るか来ないかは各自に任せる非強制式にした。それでも参加者は多い。あくまで「イベントをやって楽しい」のであって「外国人がくるから楽しい」のではない。

・自主運営。錦鯉や闘牛もそうだが、もともとお金を使ってでも楽しむという「遊び」の精神が脈々とあるから持ち出しが当然という感覚でいる。

・義務感にとらわれた時点でイベントはおわる。

・泥棒も来なくなったら村も終わり。外来者には「来てくれてありがとう」という感覚。

(10分休憩)

●セッションⅠ「国際協力の担い手の求められる資源」

河野：毛受さんの問題提起から始めたいと思います。

毛受：アンケートQ1、Q2の回答を大きく分けると、性格・能力・経験・対人関係構築能力/コミュニケーション力。Q4は現状について。

羽賀：なぜ国際協力が必要かという点を誰にでもよく分かるようにかみ砕くことができるかどうかがカギ。

三橋：中越では文化や自然があり、残していくべきものがあったり世代を超えたつながりがあると「これからどうしていくの？」と気付くことができるが、そういう資源がないとどうやって気付くのか。

横田：武蔵野はそういう場がないのでプログラム/イベントを作って人を集める仕掛けをしていかないといけないが、アパートの一室では限界があるので商店街の一角に今度移ることにした。

杉澤：地域性・文化性はないが地域課題はあって共感しあえるもの。在住外国人の増加にともない、どうやって共に生きていくかが迫った課題となっている。

山西：私の住む逗子市は高齢者が多いが、福祉の問題がある。福祉文化にしていくことが平和にもつながっていく。

杉澤：文化の伝承ではなく、これからどう多文化を融合していくか。

横田：東京でも近所付き合いはしてよいし、すべきだけどしないことが多い。一歩を踏み出してそれをしないと、他国のことなど考えられないと思う。

竹内：・リーダー像は知識、経験だけでなく、支える人がいないとスーパーバイザーもできない。なぜ羽賀さんが羽賀さんになったか知りたい。

・信じること。コンセプト化できる人間・素質を持った人をつぶさない地域づくりが重要だと考える。

新田：・確かに打たれ強い人間が残っていく。

・この場はすばらしい。でも、この建物をこのように活用しないといけない事情があったのだろうと察する。四国は気候にも恵まれていてタッグを組まなくてもやっていけてしまうところがデメリットになっている。

筧：　・アンケートに書いてある資質を持っていない人も実際は国際協力をやっている。これはどういうことか。

・羽賀さん、市長がつながっていたからよかった。町によって規模等々があるので、それに合わせてやっていくことも大事。ここでうまくいったから真似するというのでは上手くいかないだろう。

前田：大勢人がいるのもメリット。滝川は人口が少ないので出会いの機会も少ない。姉妹都市訪問しても先が続かない。

ジャヤンパット：国際協力は「仕事」ではなく、自分の「責任」だという意識。自分の親戚が地震で亡くなった際、募金のために柏崎で写真展を開催し、16万5千円集まった。当初羽賀さんに「お前やれ」と言われたときは自分にはそんな力はないと思ったが、信じて後押ししてくれた。そこまでの深い「責任」をとってくれる人がいれば他の町でもできる。

三橋：羽賀さんが忙しいなかでも社会で人をつなげていく姿をみて、若い年代同志でつなごうと話している。

上川路：この市民センターの優れている点は世代をとわないであらゆる人が集ってこれる場所であるという点。可能性としてインターネットの活用がある。若い世代の中でも開きがある。首都圏の担い手として可能性があるのは、学生と勤務者。

アンケートQ7では勤労者はあてにされていないが（そういわれると入りにくくなる）今、これからの日本をつくっていく/いる彼らを巻き込まずして何ができるのか。企業も国際協力活動をしている人々も歩みよらないといけない。

高谷：同じ目線に立つという羽賀さんの人間性が大きいと感じる。リーダーシップをとるときに、一歩退いて人をまとめることも重要。勉強になった。歴史を踏まえた活動にも感銘を受ける。

アウニ：日本は世界で2番目の経済力があるけれどリーダーシップをとれない。「出る杭は打たれる」文化があるからか。いわゆる言うことを聞く「良い子」をつくっている教育システム。大人が模範的な生き方をせず矛盾があるからこどもはリーダーシップをとれない。

杉澤：「担い手」という言葉がひっかかってどうにも答えにくい。ある日本にいるイタリア人女性の話だが、彼女は20年日本に在住しているが、認知症で日本語をすっかり忘れてしま

い、今はイタリア語を話す介護士がついている。その介護士のように、今は国際協力に直接関わっていない人々も国際協力の担い手になっていく。そういう状況で「担い手」という言葉をどうとらえるか。「日本の社会を担っていく人々の個性」を生かしていくには？ととらえ直してはどうかと思った。

「場」があってもコーディネートできる人がいないと機能しない。

ポスト羽賀がどうなるのか課題ではないだろうか。10年後のセンターは違うはず。羽賀さんのクローンをつくるのではなく、すでにいるポスト羽賀たちを生かしていってほしい。

饗場：スーパーバイザーとしてリーダーシップを発揮できる人材を地域でいかに育てるようになれるか、が大きな問題。現状で5～10年後、徳島でそうなりそうな人材が見あたらない。

羽賀：「参加する」とはどういうことか。チケットを1枚売るだけでも「参加」であるという評価をしてきていないだけ。担い手が自分を担い手と実感できるかがポイント。

竹内：羽賀さんというコンセプト化できてスーパーバイズもできる人がどこにいるか。「担い手」を支える人もまた担い手。出る杭は打たれるけど「出ますか？」と言った時に手をあげる人。

●11月14日（月）会場：ながおか市民センター2階　202号室、203号室

毛受：報告書作成について話し合う必要がある。

杉澤：「国際協力」どこまで含まれるのか？

毛受：それぞれの場所によって活動が違うので、限定しない。交流や多文化系まちおこしも含めてOK。

筧：　「主催者サイドから内容を決めつけるのではなく、活動の過程のなかで変わってきたことや各地の特色を自発的に書いてほしい。

杉澤：あえて今「国際協力」と「国際交流」を使い分けているなかで「市民間協力」としているので、それが何かをきちんと提示しないと意思が分からなくなる。

毛受：当初、先進国と途上国の地域間の協力を想定し、地域のさまざまな市民団体間の協力のあり方を考えていた。ただその例が少ないので、「市民間協力」という点よりも「マルチアクター」による国際協力のあり方に重点を置きたい。

杉澤：それぞれの団体が自分の文章の冒頭に書けばよいのか。

羽賀：もう一つのポイントとしてどうアクターを育てるかビジョン化する必要ある。

竹内：四国全体のビジョンとして書くのか、各地の特色を出すのか。包括的で字数が多めのものを一本と各地域の特色についてのものをそれぞれを書きたい。対象者は？作成後の活用法を決めてから書いた方がよいのでは？

筧：　細かいことは決まっていないが地方をまわって（4地域）配付したい。

竹内：「使える情報」をいれると使ってもらえる。各団体の情報や写真など。

筧：　青木リポーターのレポートを随所にちりばめる。

杉澤：この報告書をどうやってメッセージとして発信していくか。4地域の事例をからめることによって「自分もできる」と感じてもらえる。（国際協力を自分もできると感じている市民は少ない）4地域の共通項をエッセンスとして提供しないと、読者も「あそこは羽賀さんがいたからできたんだよね」で済んでしまう。

毛受：それは当然「まとめ部分」に記述する。オーディエンスとして、まったくの素人を対象にしてしまうと「~とは」から始めなければならなくなってしまうので、すでに活動していて壁にぶちあたっている人たちを対象としたい。

横田：「新しいアクターに対してどういうアプローチをしたらよいか分からない」というのが課題。農家に働きかけるのと学生を集めるのとでは違う。アクター層別のアプローチ法の違いなどをリストアップしたものがあってよいのではないか。

羽賀：まったく無関心だった人々が関心や意義を見い出していった過程を出すと課題が見えてくる。

毛受：他にも特定のトピック、書きたいものがあれば提案してほしい。

山西：「市民間協力」の意識を共有しないと議論が深まらない。

毛受：武蔵野でやるべきと思う。

筧：　「国際協力とは？」ではなくhow to本になっていくと思う。

杉澤：今回の4地域でやってきて書いた意味がほしい。この一年を通して実践者として国際協力に対する考えがそれぞれ分ってきた。

羽賀：入り口を「多様性」として入って共有してきたが「ゴール」はまだ共有できてないから、そこまでもっていきたい。それぞれの目指すゴールについて。

毛受：次回、その時間をつくる。（日程調整）次回の武蔵野会議は2月6日～7日（月・火）に決定する。

●セッションⅡ「地域で担い手が活動できるための環境」

毛受：本日のテーマは担い手が活動できる環境と次世代。最初にアンケートQ8の青年海外協力隊OB/OGの活用について。

羽賀：帰国後のOB/OGは逆カルチャーショックとJICAギライに陥ることがある。

毛受：四国は状況が違うようだが……。

竹内：SNNのメンバーにOB会全員が入ってくれているので派遣前の隊員に情報提供できるようにしている。隊員とは派遣前からつながっておく。たとえば、モザンビークに派遣された隊員には、「帰ってきてもモザンビークを知っている人がいるよ」と伝え、孤独感をなくす。

新田：高松では「関心があるだろう」と思って協力を呼び掛けてみたが、無償であることなどを理由に断られた。ラジオ番組（岡山）でインタビューした時にも帰国後の活動に積極的ではないように感じた。もちろんやろうとしている人はいるが、まだまだ活発ではない印象。

竹内：地域に残ることができない仕組みになっていて「やりたい」という人は地域から出ていっている現状がある。

山内：マラウイの話をしてもらおうとするが、熱意を十分もっているという印象をもてる人にまだ出会えない。

三橋：長岡のOBには広場で会える。

筧：　東京なら「シニア協力隊をいかす会」などがあるが地域では大変。

毛受：OB/OGでがんばらない人はなぜそういう状況だと思うか。

猪熊：全員が全員「還元しよう」という意識を持つことはできない。いかに推進員が引き出してあげるか。ただ、自分については、派遣前にこのセンターを知っていれば、現地での動きが違ったものになっただろうと思う。

柄沢：派遣中の隊員サポートをしてあげないと、隊員は派遣中は孤軍奮闘している。自分は派遣中、長岡ではないところの友人・知人に情報などの面で協力してもらっていたが、派遣中に協力してくれていたのが地元なら帰国後も地元とつながることができたのに、と思う。

高谷：行く前に社会経験を積んでいるかいないか、また、派遣前にやりたいことを「持っている」人とそうでない人で随分違う。

新田：カンボジアでいうと、協力隊員は現地のNGOとも日本から出てきているNGOとも連携していない。隊員は現地の状況を知らない。研修として観光地見学があるようだが、それよりNGO活動を見学するなど、研修のあり方も工夫した方がよいと思う。また、どういうお金で派遣されているかについても認識を植え付けるべき。

竹内：希望地に行けなかったのに「ずっと活用していかないと」と言われることを負担に感じているので、希望地に行ければよいと思う。

横田：受入れ先でやりたいことができずにいることも多い。日本のNGOの在外事務所に駐在するなどの手配もあってよいと思う。

筧：　協力隊は現地政府の要請にもとづいて派遣するので、職種と派遣先国とを比べると、職種が優先されるが、派遣先もある程度本人の同意を得ている。

羽賀：長岡では「JICA」よりも「協力隊」の知名度が高いが武蔵野ではどうか。

杉澤：協力隊に対する憧れは強い。

竹内：NGOは継続的に活動しているので連携していくと地域ともつながるが、学校に経験談を話しに行くだけではなかなかそうはいかない。その場の話で終わってしまいがち。

●セッションⅢ「次世代の育成と地域への広がり」

毛受：アンケートのQ10について。資金そのものに関するコメントだけではなく、評価制度全体について話し合いたい。

河野：新田さんのお話にもう少し補足をしていただきたい。

新田：英国のチャリティコミッションのようなもの。

竹内：意識だけではなく信用面をあげていく。「うさんくさい」というイメージを取り除く必要がある。

横田：知名度。行政等、地域内で活動をしていない。そこを各団体自身がやっていかないと。

羽賀：JENが広場でコーディネートしている。

饗場：森市長も長島議員も昨日子どもの教育のためには国際協力が必要だとおっしゃっていた。NGO単体がいくらがんばってもどのように行政に分かってもらうのかが課題。特に地方では行政の存在感が大きいのでこの要素は大きな意味がある。武蔵野では、行政との関係、連携は都市部だから特に必要ではないのか、それともやはり必要なのか。

杉澤：前市長の際は、教員ワークショップの海外への派遣などについて理解を得られず苦労した。それでも実行したが、やはり行政との関係づくりは事業の実現に大きな影響がある。

毛受：滝川の場合、現在の市長は理解がおありだが、どうか。

前田：当市のネックは教職員と教育委員会の意識。学校単位だと、その時々の校長にもよる。

饗場：地球広場の「場」としての機能について聞いてはいたが、実際に来て、見て、高校生にも会ってみて、初めてその有意義さを実感した。このような「場」は人を育てるので、地域の資源となっていくと思う。

新田：子どもの教育のために国際協力が必要だということを示すために、我々は行政と教育委員会と連携し6校の学校現場に入り込んで取り組みをしている。5～6時間の授業をつくっているが、学校側も子どもたちが変わっていく様子を見て、来年もまた実施したいということになった。行政も予算が削減されていくなかで、評価がより重要さを増している。たとえ担当者が乗り気でも、カンボジアに特化した活動に資金を出すことを市民に説明する必要があるので、我々NGO自体がアピールするよりも、メディアなど外部の評価が有効に働く。

山内：確かに外部の目に行政は弱い。当市は会長が民間からで行政のソトの目をもっているので幸い。

竹内：当初モザンビーク大使が松山を訪れた際、知事も面会し、メディアにも大きく取り上げられた。それをきっかけに松山に工場を持つ帝人との連携なども生まれた。

河野：このプロジェクトのコンセプトの一つでもあるが、国際協力というと外国とのつながりばかりをイメージされることもあるが、地元の足下も睨んでいる地域の課題解決と外国のそ

れがつながっていくことになるとよいと思う。その点を武蔵野では議論できればと思う。

横田：武蔵野市が土曜学校を行っているので、4年前にフィリピンでのワークキャンプの話を持ちかけたことがあるが治安を理由に断られた。その後、教員ワークショップを経てMIAやマスコミのバックアップを得たため信用度が高まり、実施に至ったことがある。

実際に行っている活動内容は何も変わっていなくても、外からの評価を得ることで不可能が可能になることがある。

饗場：徳島にイスラエル・パレスチナの高校生を招く交流行事があり、私も関わったが、そこでホームステイやホームビジットを提案したところ、市の総務課の「何かあったらどうするのだ」という判断で実現できなかった。こういうケースでは行政にはどのように働きかけると説得できるのか。

新田：行政は他地域での成功事例を示すとすぐに納得してくれることが多い。

饗場：山古志村でもイスラエル・パレスチナの学生交流を受入れているが、どうやって警察の「心配」を払拭できたのか。

羽賀：入管関係者に話し、公安にかけあってもらった。この類の根回しは必要と思われる。

毛受：信用度をあげていく「評価」だが、一般人からみて信用できるのはどのような立場からの評価だろうか。

新田：第三者機関と行政が連携して実施するもの。

竹内：例えば、中間支援のNPOセンターなどがやるとよいのではないか。誰の意見を聞くと「安心」するのか、評価そのものが次のステップにつながるので、NGO側にとっても積極的に関わってよいこと。

毛受：自律性を保つという意味で評価を受けたくないと言うNGOもあるが。

竹内：それは、受けたいNGOだけを評価していくしかないと思う。

新田：英国ではチャリティコミッションがあり、各団体は評価を受けないと税制優遇を受けられない。彼らが紆余曲折の末に見つけ出した評価システムなどを参考にしながら、我々がどうするのか考えるべきではないか。

杉澤：国際交流については、地域性によって事業内容やその生かされ方も違うので、外部評価は危険だと考える。団体の資金繰りなどについて透明性を打ち出すのは、団体のウェブサイトでもできること。行政機関などではなく市民こそが評価すべき。

新田：NGO単体もさらけ出さねばならないが、行政の「平等／公平主義」に対抗する何かが必要。

杉澤：そのような行政文化と市民文化をつなげるのが国際交流協会の役割だと思う。

新田：その協会も地域性があり、香川ではその協会が「県」の文化一色なので、期待できないという背景がある。

毛受：国際交流協会に対する評価も必要だろう。

山内：行政の評価システムの中では、NPO/NGOは淘汰されていってしまう。そうされないように活動を調整すると、団体の活動方針などもぶれてしまう。岡山県の国際貢献条例のように条例化するとよいのではないか。

竹内：現状で問題はないが、市からの評価よりも市民の目を育ててからなら行政も動かざるを得なくなるのではないだろうか。

山内：地域の状況を考慮した制度にすると評価者の軸がぶれないだろう。

杉澤：教員ワークショップの最初のころは「NGOは熱意がありすぎて一緒に活動できない」という空気もあった。NGOの思いと市民の思いとが歩み寄って初めて関係構築と協働ができる。そういう芽がゆるやかに育つ場が必要。

羽賀：NGOは独りよがりになりがちで敬遠される。また、県は直接に市民との関係をもたないので、市民の意思などについて冷めた視点をもっている。行政の評価だとどうしても量的評価になってしまうが、「信用評価」が必要だと思う。

筧：　JICAは直接評価せず、NGOの自己評価の正当性を問う。NGOの活動がどれだけの市民に影響を及ぼしたかは分からないので、我々はNGOを評価できないし、するつもりもない。

新田：国の税制づくりには経営者のマインドがいる。NPO法は必ずしも国際協力・交流の分野のNPOを促進してはいない。

毛受：時間が残り少ないが、他に議論したいことは？

竹内：滝川ではマラウイとの事業をするために他との新しい交流を押さえることになったりはしていないか。

前田：農業支援というのが先にあって、相手先としてマラウイが提案されてきた。今はブータンもでてきているし、協力相手国には固執しない。

竹内：姉妹町内会等をつくるという流れにしていくつもりはないのか。

前田：やる人もいるだろうし、彼らはやっていけばよいと思う。

高谷：マラウイとの事業に触発されて、今はモンゴルとの交流をする団体もでてきている。
我々はそういった動きを見守りサポートしていく立場にある。

山内：当協会以外の団体の活動も広報などの側面的支援を行っている。

毛受：今のように地域ベースの場合、地域全体が一体となってつながるのではなく、参加したなかで複数がつながって残っていく。

滝村：JICA草の根技術協力の評価5項目もご参照いただきたい。

饗場：羽賀さんは国際交流と国際協力との区別についてどのような認識を持たれているか。

羽賀：行政は、国際交流まではやるが、国際協力には目が向かない。また、行政の考える「国際交流」は得てして欧米向きで「＝英語」という発想。国際交流のなかから国際協力の芽が

みえてくるのではないだろうか。

新田：交流をすることで、支援活動としての国際協力の担い手予備軍を育成できる。また、国際協力は、交流の要素がないと継続しない。

山西：「国際理解」がその両者のコアにある。国際理解があってこそ、国際交流や協力が成り立っていく。

前田：相手側によりメリットがあると国際協力だととらえられがち。

横田：日本の課題をフィリピンのホームステイ受入れ者が学ぶことで、互いに意識が芽生える。

「マルチアクター参加による市民間協力推進プロジェクト」第五回検討会

議　事　録

2006年2月6日（月）～7日（火）

於　東京都武蔵野市

プログラム

2月6日（月）会場：武蔵野市国際交流協会（MIA）会議室

13:30～　開会挨拶　幸池稔晴（武蔵野市国際交流協会理事長）

14:00～16:00　武蔵野市における活動紹介1

杉洋経子（武蔵野市国際交流協会プログラム・コーディネーター）

山西優二（早稲田大学文学部教授）

＜外国人地域参画事業参加者＞

エルデン・ダーライ（東京学芸大学研究生）

馬辰暉（ま　しんき）（東京学芸大学院生）

＜青年のための国際理解講座参加者＞

石塚和香子（早稲田大学学生）

加藤丈太郎（早稲田大学院生）

16:00～　NPO法人ACTION事務所へ徒歩で移動

18:00～20:00　武蔵野市における活動紹介2

＜教員ワークショップ参加者＞

川田久之介

小林正人（都立鷺宮高校）

佐藤智彦（江戸川区立西葛西中学校）

辻本昭彦（武蔵野市立第一中学校）

2月7日（火）会場：武蔵野市国際交流協会（MIA）会議室

9:00～11:00　セッション1

「全体の振り変えりと各地域特性から見える市民間協力」

11:00～12:30　セッション2「4地域間の今後の連携の可能性」

12:30～13:30　昼食

13:30～15:30　セッション3「『マルチアクター』を拡大するための方法と課題」

参 加 者

検討委員

【北海道滝川市】

高谷富士雄（たかや　ふじお）	たきかわ農業協同組合参事、滝川市教育委員会委員 社団法人滝川国際交流協会理事
前田康吉（まえだ　こうきち）	社団法人滝川国際交流協会会長
山内康裕（やまうち　やすひろ）	社団法人滝川国際交流協会事務局次長

【新潟県長岡市】

栄　隆士（さかえ　たかし）	長岡技術科学大学留学生センター教授
羽賀友信（はが　とものぶ）	長岡市国際交流センター地球広場センター長
三橋栄治（みつはし　えいじ）	ドラミックス代表

【東京都武蔵野市】

杉澤経子（すぎさわ　みちこ）	武蔵野市国際交流協会プログラム・コーディネーター
山西優二（やまにし　ゆうじ）	早稲田大学文学部教授

【四国】

饗場和彦（あいば　かずひこ）	徳島大学総合科学部助教授、四国NGOネットワーク運営委員
竹内よし子（たけうち　よしこ）	NPO法人えひめグローバルネットワーク代表 四国NGOネットワーク代表
新田恭子（にった　やすこ）	NPO法人セカンドハンド代表 四国NGOネットワーク副代表

ゲスト

幸池稔晴（こういけ　としはる）	武蔵野市国際交流協会理事長（6日のみ）
加藤信吾（かとう　しんご）	武蔵野市国際交流協会事務局長（6日のみ）

リソース・パーソン

〈外国人地域参画事業〉

エルデン・ダーライ	東京学芸大学研究生（6日のみ）
馬辰暉(ま　しんき)	東京学芸大学院生（6日のみ）

〈青年のための国際理解講座〉

石塚和香子(いしづか　わかこ)	早稲田大学学生（6日のみ）
加藤丈太郎(かとう　じょうたろう)	早稲田大学院生（6日のみ）

〈教員ワークショップ〉

川田久之介	
小林正人(こばやし　まさと)	都立鷺宮高校（6日のみ）
佐藤智彦(さとう　ともひこ)	江戸川区立西葛西中学校（6日のみ）
辻本昭彦(つじもと　あきひこ)	武蔵野市立第一中学校（6日のみ）

コーディネーター

河野善彦（こうの　よしひこ）	JICA国際協力客員専門員、笹川平和財団常務理事
毛受敏浩（めんじゅ　としひろ）	財団法人日本国際交流センター　チーフ・プログラム・オフィザー

【独立行政法人 国際協力機構（JICA）】

草野孝久（くさの　たかひさ）	JICAプラザ広尾設立準備室長（6日のみ）
吉田　丘（よしだ　たかし）	国内事業部市民参加室長（7日午後のみ）
松本　淳（まつもと　あつし）	JICA東京連携促進グループ長兼広尾準備室副室長（7日のみ）
滝村卓司（たきむら　たくじ）	JICA東京連携促進グループ計画・管理チーム職員（事務局）

【財団法人 日本国際交流センター】

森田慈子（もりた　しげこ）	プログラム・アシスタント（事務局）

オブザーバー

青木　公（あおき　ひろし）	JICA東京国際協力サポーター
雨宮律子（あまみや　りつこ）	JICA山梨県国際協力推進員（6日のみ）
井出悦子（いで　えつこ）	JICA東京多摩地区国際協力推進員
藤野紀子（ふじの　のりこ）	国内事業部市民参加協力室市民参加課題支援ユニット
三田義雄（みた　よしお）	武蔵野市国際交流協会職員

●2月6日（月）会場：武蔵野市国際交流協会（MIA）会議室

開会挨拶

幸池稔晴、武蔵野市国際交流協会理事長

ようこそ武蔵野市へ。市政について説明申し上げたい。武蔵野市は人口13万人で、登録している在住外国人は2400人。歴代25代の市長全員が「福祉と教育」を掲げている。

市内の小売業の年間販売額は2500億円であり、平成の初期は財政力の一番高い町であり、財政力は日本で2～3番目である。

MIAは1989年10月13日に任意団体として市が設立した。現在会員は980名で予算規模は6000～6500万。市からの派遣職員はおらず、加藤事務局長以下7名のスタッフ（うち、プロパー職員2名）で運営している。

・地域とともに歩む国際交流と外国人支援を念頭に活動している。

・地域内の大学や小中学校とも連携している。

・協会の法人化を設立20周年に間に合うように実現したい。

・市が毎年市民を対象に実施しているアンケートでは、40％以上が「安全」関連の対策を希望しており、都市交流や国際交流を希望しているのはわずか1.8％。ここは当協会がPRをするしかないと思っており、市の人口の1％が会員になってくれることを目指している。

（質疑応答）

栄：　先ほどのアンケートではなぜ都市交流の希望が低いのか。

幸池：「安全」を希望する率が毎年高い。私自身、理事長に就任してからソロプチミストやライオンズクラブなどにも説明をしているが、なかなか国際交流への理解を浸透させるのは難しい。

河野：高齢化対策に関する関心も高いそうだが、武蔵野市の高齢化の度合いはどの程度なのか。

幸池：人口の16％程度。

河野：他に質問がなければ早速プレゼンテーションにうつりたい。

武蔵野市における活動紹介1

杉澤：（レジュメ参照）

(1) 外国人受入れ側の意識が問題。支援策だけでは不十分で、a+bがcにつながるという考えを持っている。

(2) 外国人が「住民」としてどのように地域に関わっていくか。「青年講座」や「教員ワークショップ」から、参加者がどのような学びを得て、自分たちの事業に生かしていくか。教員ワークショップなどは、先生一人がクラスの生徒達に影響を与えると考えると、影響力は大

きい。今では全国から注目を集め、参加者がある。「国際交流まつり」は年間を通して、上記の事業の参加者達が運営する。これによって、外国人も地域の一員であるという認識が高まる。

(3) 事業の参加者が関わりあうことで、お互いの「気づき」が増え、事業に発展していくチャンスが増える。

(外国人地域参画事業、青年のための国際理解講座参加者による発表)

山西：(「参加型」のプログラムのやり方の実演としてレヌカの学びならぬ「ダーライの学び」。各テーブルに12枚カードを配布。そのうち半分がモンゴル自治州で考えていた日本のイメージ、もう半分が日本に来て実際に感じたことだが、どのカードがどちらかをグループで話し合って決める。イメージ先行ではなく、まず相手がどういう個人かをみるためのアイスブレイク、導入の手法)

ダーライ：・モリンホール（楽器。馬頭琴）の説明。

・曲演奏（少女の悲しい運命についての曲、荒城の月、馬が戯れる伝統的な曲）

・「ダーライの学び」のカードの説明。日本に来てからのカードは「豚肉をよく食べる」(安いので)、「時間を守る」、「名字で相手を呼ぶ」「勉強しながら働いている」(レジのアルバイト。日本文化を学ぶ機会にもなる)「血液型を気にする」「アーモンドチョコレートをよく食べる」。他はモンゴル自治州で考えていたこと。

杉澤：一般の人々に「豊かな文化をもつ人たちが私たちの地域にも住んでいるのですね！」と言葉で言ってもピンとこないが、このように具体的に話しや演奏を聞いて初めて実感できるのではないか。馬さんは、本当はピアノも演奏できるが、雑談ができる関係がないとこうした多様な側面はあまり見えてこないもの。今回は地域活動への参加についてお話をしていただく。

馬：　自分は来日6年目。自分では自分のことをさほど活発とも思っていないが、国際交流祭りに参加してMIAスタッフとも親しくなり、いろいろと関わるようになった。青年のための国際理解講座の実行委員会にも参加した。今の自分は恵まれた環境にいるとは思うが、物足りないところもある。自分が自分たち外国人のためにやってほしいと思っていることと、実際に地域で行われている活動が一致していないこともある。外国人のニーズと日本での国際交流のイメージが不一致だと思う。ここに集まっている人やボランティアで関わる人々は視点が「外向き」だが、学内やアルバイト先で知り合う人々は、外国人に対して一歩引いていたり、差別意識・反発を持っていることがある。(アルバイト先のシフト表で自分の漢字の名前はきちんと標記されていても、インド人の名前は個人名ではなく「インド人」と書かれていたエピソード等)

（ACTION事務所へ徒歩で移動、見学、休憩）このような人々や日本の学生とは、遊んだり軽い付き合いをしているには共通点が多いが、歴史についてなど、根本的な考え方については必ずしもうまく議論できず、不一致も多い。

三田：外国人地域参画事業においては、「○○人」というくくりではなく、個々人の顔のみえる存在として参加してもらっている。また、国際交流まつりはできるだけ近くに住んでいる人々に参加してもらい、外国人ともご近所付き合いの深さにまで発展することを願いつつ実施している。

（質疑応答）

高谷：（ダーライに）なぜ作曲をヨーロッパなどではなく日本で学ぼうと思ったのか。また、モリンホールの調律方法についても聞かせてほしい。

ダーライ：演奏家としての技術だけではなく、自分が演奏する曲を自分で作りたくて作曲を学ぼうと思った。日本を選んだのは、アルバイトをしながら、自立して勉強ができるから。また、以前から同じ地方から留学してきている先輩がいて、日本について良い話を以前から聞いていたから。モリンホールの調律は、金具で行う内モンゴルと木の噛み合わせで行う外モンゴルとで方法が違う。

河野：（馬に）日本人の中に違う層がいくつかあるとのことだが、真剣な議論をできるようになるにはどうすればよいとお考えか。

馬：　共通点を見出してコミュニケーションをとる術がいる。考え方の差異があるのは致し方のないことで、それらを消す必要はないが、共通点を見出して、互いに人間同士として扱うことが必要。

饗場：これまでに経験した「違い」の具体例を教えていただきたい。

馬：　例えば、靖国問題。国のために亡くなった人に対する扱いとして、日本で祀るのは理解できるが、中国人にとってはどうしても彼らは「侵略者」のまま。

饗場：中国では死んでも罪人だが、日本では死んだら許されるという死生観の違いもあるのかもしれない。この類の話題を避けて共通点にのみ目を向けてお互いに付き合っていくべきか、これらの点も突き詰めて議論して分かり合っていくべきか、どちらと思うか聞きたい。

馬：　一般人にとっては関係のないことだが、政治などの「カード」のように扱うべきではない。避けられるならば避けた方がよいと思うが、譲り合いもあるべき。

杉澤：事業をやっている側からは、まさしくこのような話し合いができる関係づくりができるかどうかがカギだと思う。

河野：そういう関係づくりをできていると思いますか。

馬：　自分はこのような場にも出てくるが、ほとんどの留学生は生活に追われていてそれどころ

ではなかったり、そのような話しをすることを求めてもいない。

榮：　全面的ではないことだし、一般化してもいけないが、多くの中国人にとって日本人に対する嫌悪感というのはいつごろから芽生えるものなのか。

馬：　映画の中の日本兵と今を生きている日本人は違う。後者に対しては共通点も多くあるので反感を持とうにも持つことができない。

榮：　それは学校の歴史教育を受けていてもそうなのか。

馬：　多くの人々にとって、日本のイメージは東条英機ではなく、ドラえもん。今を生きているお互いの人間性を捨て去ることはできない。

毛受：（馬に）もともと偏見が強くて国際交流の場にも出てこないような人たちに対するアプローチの仕方はどうあるべきか。

馬：　時代の流れに遅れたくなければ、他の国籍の人々とも調和をとり交わらなければならない、という視点、そしてそのような交流は楽しいのだという視点で活動しているグループにも所属している。いろいろと煩わしいことも多いが、取り組み続けるだけでも違いがあると思っている。

杉澤：では、休憩後は青年のための国際理解講座の参加者によるプレゼンテーションをしたい。

（休憩）

加藤：自分は、Asian People's Friendship Society (APFS)のメンバーもしている。資料として配付の「むさしのFRIENDs No.3」5ページ目に実施概要が掲載されている。今回は作り上げていく過程がとても楽しく、そのなかで馬さんたちとも仲良くなることができた。今日は、なぜ関わったか、何を得たかについて三人で発表したい。

石塚：企画段階で多くの外国籍生徒がいる江戸川区葛西中学校を見学して、外国籍生徒に対するサポートが足りていないことを再認識した。それぞれの国が、どこにいても子どもが自分らしく生きる環境作りを一緒にやっていくべきだと学んだ。今回の講座では、学生や社会人などいろいろな立場の人がいたが、「青年」としてつながることができたので、国際理解という枠組みだけではなかったのもよかった。地域の外国人と交流する以前に、まずは日本人でも隣近所の人々との交流から始める必要がある。

馬：　自分は分科会1に参加したが、この場で（出会った人たちとの関係を）終わるのではなく、その後どうつないでいくか。勉強会などで関係をつないでいき、社会に反映させていけたらと思う。

加藤：MIAに来るようになったのは最近だが、青年のための国際理解講座の運営を通じてネットワークの広がり方を体感することができた。APFSではボランティアの年齢や層が限られていて、接する機会のある外国人も自ずと限られ、他の青年や外国人と意識を共有したり

ぶつけあう同世代の仲間がなかなか見つからなかったので、今回の出会いはパワーの源となった。同様のコメントは他の参加者からも聞いており、話をするだけではなく、行動に移すことの必要性を学んだ。

（質疑応答）

河野：このプログラムは始まって何年たつのか。

杉澤：1994年が第一回目（ACTION横田さんも参加）だが、毎年行われているわけではない。

河野：参加者は全国から集まっているのか。

杉澤：特にこだわっていない。

高谷：後継者の層はあついか。

加藤：ほとんどが当日参加。もともと関心の高い人が実行委員会に参加した。

饗場：（石塚に対して）高校三年生という受験を控えた大切な時期にあえて参加したのはなぜか。

石塚：私は他の団体に入っていてその団体経由で高校二年生の時に参加した。

饗場：大学やNGOにもMIAから情報提供をしているのか。また、予算はどの程度かかっているのか。

杉澤：MIAは事務所もオープンにしてあり、大学生などの出入りも多いので、情報は流通しやすい。予算は20～30万円だと思う。講師謝金と広報費用のみ。実行委員会はMIAが召集して、各委員会の進捗をフォローしている。

河野：社会起業家という視点での青年の集まり（学生、社会人の分け隔てなく）はよくあると思うが、他に今回の講座の後に続いている輪はあるか。

加藤：CSRを扱った分科会では勉強会が続いている。また、参加者それぞれがもともと関わっていたNGO/NPOの活動に、今度はお互いを招き合っているケースもある。

河野：（杉澤に）この講座の後に発展した活動としてACTIONはもっとも解りやすい例かと思うが、他にも似たケースはあるか。

杉澤：ACTIONほどになっているのはないが、活動が他にもできているので、そのような場所に参加者が次のステップとして参加していたりする。

山西：今回の実行委員は「一本釣り」してきたメンバーばかりだが、それだけにそれぞれ既に何か活動を持っている人を連れてきている。

饗場：委員会を結成してからつくっていくとなると中身が固まっていない状態で予算申請するのだと思うが、その場合行政の予算を得るのは難しいのではないか。

杉澤：行政には、彼らの枠に入っているように見える見せ方で申請して予算確保をするのが私たちの仕事だと思う。また、国際交流まつりの一部分の企画を加藤さんらに任せたが、全く

の丸投げをするわけではなく、こうしたメンバーは青年の講座の実行委員として活躍したりその後の経団連の社員教育プログラムの企画メンバーに入っているなど実績がある。そうした経緯を踏まえたうえでどの程度任せられるかを判断している。

前田：それらの企業は、経団連との「お付き合い」として関わっているのか、真に重要性を認識してのことなのか。

杉澤：今の担当者は少なくとも理解してくれている。ただ、こちらとしては重要だと認識させていくことや伝えていくことが重要。経団連はこれまで国際交流協会の事業に後援を出したことがなかったが、滝川でもやってみればよいのではないだろうか。地域性や素材（武蔵野では人材）の違いはあるだろうが、それらの組み合わせ次第だと思う。

饗場：今回のマルチアクター研究ではアクターとしての企業はあまりでてこなかったが、経団連を説き伏せたロジックはなにか。

杉澤：「CSRに取り組んでいない企業は生き残らない」

三田：国際交流まつりでは地元商店街ごとにブースを出してもらったり、MIA関係者と出会っていく場として認識されている。また、商店街の祭りにもこちらから参加したりする。

河野：失礼ながら、設立して18年経つ今でもまだその過程にあるのか、という感じもするが。

三田：国際交流の分野自体がこれまで外向きだったが、「国際」に目が向いていた人々が「地域」に目を向け初めてきている。地域の人々も「内なる国際化」に目が向いてきて、双方とも動いてきたからこそ実現している。

杉澤：武蔵野にある17のコミュニティセンターはすべて市民によって運営されているが、人が固定化しており、何か新しい案を持ち込んでも、なかなか運営委員会をとおらない。ただ、このごろはすこしずつMIAのメンバーがコミュニティセンターの運営委員に入ったりしていてつながりができ始めている。

竹内：公民館とのつながりは？

杉澤：社会教育行政的な公民館はなく、代わりにコミュニティセンターがある。

竹内：NPOセンターは？

杉澤：行政内に市民活動促進を担当する部署があるが、かれらはNPOの設立支援などを行うだけなので、事業の面では直接個々のNPOとやり取りをしている。

山西：若い人の「おもしろさ」は枠のなさでもあるので、枠をつくってそのなかで広げていくことには無理がある。また、必ずしも起こった活動を継続する必要はない。文科省の職員も商社の社員も学生も一緒に活動しているので、その輪の中でつながる人脈は、今後もどのようなところでどのように役立っているか分らない。先行投資的な側面がある。

（ACTION事務所訪問）

武蔵野市における活動紹介2：教員ワークショップ参加者による発表

杉澤：教員ワークショップの概要について、それぞれの先生方からプレゼンテーションをしていただく。

辻本：自分自身は理科の教員だが、常々外国人をお客さん扱いして招くだけが国際理解教育なのか疑問を持っていた。

・7年前に武蔵野に来て「ここが変だよ！日本の中学生」やシャプラニールの演劇ワークショップを通じて、学校とNGOとの連携が始まった。

・「日本語教室丸ごと交流」を実施。地域との連携にもなった。英語能力別に生徒をグループ分けしたが、英語ができないグループの子どもたちの方が創造力豊かにコミュニケーションをとっていた。

・「地域で生活していて困った事は何か」と質問することを必須にした。

・外国人側の反応として、日本人の中学生は恐いというものがあった。交流の後は、生徒の半数が次回、町で今回交流した外国人と再会したら挨拶をすると答え、挨拶しないと答えた残りの半数も相手が覚えていなかったら困るからという理由であり拒絶的なものではなかった。

・学校にとって地域の外国人と直接連携することは難しく、コーディネーターが必要。また、外国人をゲスト扱いするのではなくフィフティーフィフティの関係にするにはどうすればよいのか悩むところ。

・国際理解教育から多文化共生の視点に移行していきたい。

・「武蔵野市改造計画」と題して市長を招いた生徒との懇談も実施。

・教員ワークショップの一貫でフィリピンに行った際、理科の授業で実験が行われることがないと知り、もともとある簡単な道具で行うことのできる実験を披露した。

（質疑応答）

河野：市長への提言と国際交流のつながりについてもう少しご説明いただきたい。

辻本：配布の「学校と地域の協働が生み出すダイナミズム」第二部22ページ目の表にあるように職場体験も福祉学習と同様に国際理解学習も地域をキーワードとして行っている。

河野：外国人が刺激であって、地域について自分で考えることがねらいということか。

辻本：そのとおりであり、それはそもそもの前提。課題解決学習を総合学習の中に取り入れている。

高谷：他の教員達は積極的に取り組んでいるのか。

辻本：必ずしもそうではないが、自分はたまたま教務主任というカリキュラムを作る側にいたの

で実現できた。当校では教員の3分の2がなんらかの形で関わっているが、それは稀なケースといえる。地域から出ていくこと自体なかなかない。

杉澤：次は、ビデオレター交流の創始者の佐藤先生と、地元でこの手法を使って地域展開をしている川田先生にプレゼンテーションしていただく。

佐藤：個々人の顔が見える国際交流を行いたくて中学3年生の選択社会の授業でビデオレター交流を企画した。（配布の「わーい！NGOが教室にやってきた！」の57ページを参照）授業の3回に一回はACTIONの横田氏が参加。普段の生活がわかるようなビデオ作りを心掛けた。また、横田氏が加わってくれたことで物の受け渡し（ビデオで鶴の折り方を撮影して、その折り鶴を実際にフィリピンに持って行っていただく等）もでき、交流が深まった。また、横田氏が実際に来てくれたことで生身のNGOのイメージを持つことができた。授業の最後にはJICAネットのJICA-Net会議を実施。この時初めて顔を合わせるのではなく、すでに一年間の交流があったため、お互いに顔が写ってすぐにうち解けることができ、大変好評だった。

課題としては、教員は転勤があるので、担当の教員が転勤してしまった後に交流をどうするかが難しい。武蔵野市各地にあるコミュニティセンターを学校と地域の接点の拠点としてとらえ、NGO（ACTION）を通して国際交流を続けられるような態勢をつくろうと動き出し始めたところで私自身が転勤となったので、一旦コミュニティセンターとの活動は休止している。現在勤務している学校でもビデオレターを続けているが、武蔵野との地域性の違いも見えてきた。途上国との交流に関する関心の持ち方が地域により異なるため、学校の置かれている地域性などにも配慮をし、授業つくりをすることが必要であると考える。

（質疑応答）

河野：この取り組みが他の先生に波及しているか。

佐藤：前任校、現在の勤務校共に総合学習のカリキュラムが決まっていたので、総合学習の授業内で学校全体を巻き込んでいくことは難しかった。現在の勤務校の英語科の教員はやろうとしていたが、いずれにしても現在の勤務校では時間が1時間しかないため実施はかなり厳しいものがあり、工夫が必要である。

杉澤：でも、教員ワークショップ内で他の先生達が似た取り組みを始めた。川田先生は小学校の教員だが、公園づくりワークショップなど地域での展開についてお話いただきたい。

川田：市の土曜学校の一部として公的施設で実施しており、対象は小学校4年生から6年生で、通っている学校はそれぞれバラバラ。多くても月に3回程度の頻度で顔を合わせいている。皆学校が違うため、最初は子ども同志のコミュニケーションが上手くいかず、誰が交

流のイニシアティブをとるか等、難しい点があった。ビデオレターだけではなく、他の手法も取り入れないと生徒たちも飽きてしまうので、ACTIONの協力も得ながら、いろいろな地域のカレーを作ってみたり、感謝祭の始まりについて寸劇を作ったりしている。保護者対象のアンケートでは99%がよかったと回答してくれた。

佐藤：私も川田先生も武蔵野出身、土曜日なので、教員も公務とは違った感覚で望むことができ、市－地域－NGOの連携として良い事例と思う。

杉澤：ビデオレターについて、以前に子どもの肖像権を侵害するとして市に却下されたこともあった。

佐藤：今の勤務校でも保護者の許可を得てから実施するようにしている。

杉澤：NGOだけでも教員だけでも実現できないことが分っていただけたかと思う。次の小林先生は高校の教員として、2年目から参加してくれている。

小林：自分は高校の社会の地理の教員。最初このプログラムに戸惑った。しかし教育の営み・教え合いは小中高等学校共通であることを改めて認識でき、自分にとっても学びになるプログラム。他の先生方とフィリピンを訪問した際のことを通して発表したい。

・アエタ族はピナツボ火山噴火後、他の町の人々と同じ避難キャンプに住むことを余儀なくされていたが、自分たちのまちに戻っている。

・彼らに対して、一番大切なものは何かと尋ねると、一番大切なのは家族で、二番目には教育だという答えが多く返ってきた。この二番目の教育というのは、無知ゆえにだまされたりしないようにするためだということだ。

・ホームステイ中に私が大人たちと会話をしていると、子どもが会話の中に入ってきたりするが、大人たちは子ども扱いしないできちんと意見を聞いていた。

・訪問したマグサイサイ高校では、日本が発展したのは良い理科の授業があったからだろうという期待もあり、理科の授業を辻本先生が行った。また、社会の授業の一貫として佐藤先生のフォトランゲージの手法を用いた授業が行われた。この訪問では、先生たちとの会話を通して、教員としての悩みが共通していることが分かり、教育の営みというのは国が違っても根本では共通しているのだと感じた。

・自分の授業にACTIONのワークキャンプのOB/OGが来てくれたりすることで、生徒たちが変容していった。また、それに接する過程で自分自身も変わってきたと思う。

佐藤：ビデオレターを実施している地域に昨年・一昨年と訪問し、地域の人々と話し合いをするなかで感じたことだが、フィリピンの人々も住んでいる地域・経済的側面・民族・習慣の違いなどで、コミュニティとしてのまとまりはさまざまであった。特に経済的に格差がある地域では、コミュニティとしての方向性が見えにくいように感じた。これは日本でも共通しているのではないだろうか。

辻本：「だまされないために教育が必要」という言葉には教育者としてショックだった。「教育協力」をしていくと言っても、フィフティーフィフティの関係でいたい。コミュニケーション力の面では、日本人は多いに学ぶところがあると思う。

杉澤：佐藤先生にここで「フォトランゲージ」についてご紹介いただきたい。

佐藤：これから配る写真は、「地球家族」という写真集に掲載されているもの。（1枚目の写真の家族の朝食にのぼる食べ物をグループで話し合う。2枚目については、切り離されている上半分に何が写っているかについて話し合う。→コミュニケーションをとるプロセスを実践）この手法でワークショップをすると、フィリピンでは男女の別なくすぐに話し合う雰囲気ができるが、日本では必ずしもそうではない。ただし、これまでに接してきている学習素材が多いせいか、日本の方が知識量自体は多い。日本はコミュニケーション能力の育成・フィリピンでは知識量（情報量）の育成が必要であり、日本とフィリピンでは課題が異なっているように思う。

山西：教員ワークショッププログラムには、私自身は初年度は講師として参加したが、その後はアドバイザーとしての参加をしている。教師にとっての学びの場をつくることはとても大変だが、きわめて重要。この回のメンバーが他の教員のNGOを入れた授業案を「たたき合い」議論をして、一緒に作成していく。

杉澤：何かご質問があればどうぞ。

河野：このプログラムがここまで発展して続くと思っていたかどうか。また、今後どれほど続くとお考えか。

山西：模索しながら作ってきた。

杉澤：総合学習が取り入れられるようになった等の外的要因もあった。初年度のメンバーがその後企画側に入ってくれるようになって広がった。

山西：たとえ年間20名集まってもそれだけでは「点」でしかない。そこで、2年目には夏期集中講座が発足し、その翌年にはフィリピン訪問が始まった。毎年いろいろな案があり広がっていくので、どこまで続くかは、何とも言えない。

辻本：常に新しいメンバーが入ってくるので、形骸化しない。

河野：皆さん自身は5年でも10年でも続けたいというお気持ちがあるのか。

小林：最初から長期的計画があるものではなかった。教育は答えよりも問い続けることに意義があるジャンルと思う。

川田：小学校では学級づくりにそのままつながる。遠くよりも近くの子のことが学べるので、小学校の教員が関わっていれば続いていくと思う。

饗場：国際理解教育をすると何が変わるのか端的にお聞かせいただきたい。

小林：視点が多様になる。自己と他者への思いやりが芽生える。人との関係づくりを通して自分

を理解することにつながる。

佐藤：自己肯定感を育てることで他者への理解につながる。フォトランゲージなどの手法を使ってコミュニケーションをとることで、誰かが自分の意見をきちんと聞いている実感を得られる。それが存在を認められているという自己肯定感につながり、他者への理解を促すことになる。

川田：友だちづくりに役立つ。嫌な子とも一緒に何かをやり遂げなければならないという私的にはネガティブな感覚があっても、行事をグループとしてやらないといけないといういわば公的な環境をつくることで、どのように努力をすると嫌な思いをお互いにしないで一緒にやれるのかということを考えるようになる。

辻本：子どもたちが、ディスカッションが楽しい。問題解決に取り組むことが楽しいというようになった。

川田：これだけの外国人が住んでいるのだという感動が地元の武蔵野市を見直すきっかけになった。

饗場：このワークショップに関わり続けていらっしゃる先生方は学生時代などに国際協力など関連のある活動をしていらっしゃったのか。

辻本：両親の国籍が違い、家庭内が多文化だった。クラスの中に外国人がいると、自然と応援したくなる。

佐藤：特に国際協力には関わっていなかった。

小林：学生時代に国際協力の経験はありませんでした。しかし外国には大変興味があり、社会人になって初めて外国に行き、日本の豊かさに気付いて、国際協力にも強い関心を持つようになった。

●2月7日（火）会場：武蔵野市国際交流協会（MIA）会議室

セッション11：全体の振り返りと各地域特性から見える市民間協力

毛受：この一年間、地域の暮らしぶりに根ざした国際協力がいろいろな形で行われていることを学んできた。実際にプロジェクト化するかどうかは別として、この学びを共有したこの4地域でどのようにつながっていくことができるか話し合いたい。

杉澤：各地の活動の概略は「知っていた」が、実際に行ってみて「分かった」。活動していくなかで変容していくアクターの気持ちなども感じることができた。滝川に行って感じたのは、どうしてもJICAがこの国の国際協力を引ぱっていくので、JICAがどう反応して市民の発意を拾っていけるスキームをつくるかがカギだということ。四国では、今活動されている広域ネットワークの維持・発展の課題に気付き、JICA四国のコーディネーション機能が求められる。

運営についてNGOに負ぶさっている限り、維持は無理だと考える。長岡は、羽賀氏の存在につきる。JICAが地域に専門家を投入することの効果を学んだ。

毛受：全検討会に出席した方から感想を述べていただきたい。

河野：その際、このプロジェクトでは「マルチアクター」といっているが「地域ぐるみ」という意味で使っている言葉なので、みなさんの活動が地域ぐるみかどうかということも念頭に置いてご発言いただきたい。

毛受：あらためて、どのような背景と目的で始まったプロジェクトだったか振り返ると、地域にどのように国際協力活動を根付かせていくかを考えるためにスタートした。そのとおりのプロジェクトだったかというと、実際に各地を訪問してみると、「国際協力」ではあるものの、活動が多様でJICA的な「国際協力」ではないことが分かった。いきなり「国際協力」というのでは、地域では広がりにくいという感想をもった。

山内：四国では「四国」として広くとらえている。でもやはり各地にダイヤモンドのようなアクターがいてこそ成り立っている動きだと思う。長岡も山古志の錦鯉など地域の文化にうまく国際協力をぶつけて広がりをみせている。武蔵野は首都圏なので「密集」という印象。「人が財産」という意味がよく分かった。これだけせまいなかに人がたくさんいる。ただ同じように、外国人も多すぎてかえって他市民との乖離があるのをつないでいこうとしているのがよく分かった。各地では、行政のバックアップを強く感じた。国際協力についてはもちろんJICAがエキスパートだが、地域とその専門性をつないでいく必要があり、コーディネーターが重要と考える。最も今強く感じているのは、滝川に欠けているのは若手の人材教育だということ。それを強くしていかないと広がらないと思う。

饗場：アンケートにはキーワードだけ書いたが、説明したい。実際に目で見るということは、話を聞くのとはまったく違うことだと分かった。その意味で各地を実際に訪問できたこのプロジェクトに参加できて非常に感謝している。地方における行政の存在感は大きい。行政のイニシアチブがあるのとないのとでは活動の結果に大差を生むということがよく分かった。国際協力を地域で進めようとすると、遠い外国に対してなぜお金を投入して協力する必要があるのか、という反発がある。そうではなくて、地域の活性化や教育の効果として自分たちに返ってくるものが大きいのだ、ということが依然、多くの地域では理解されていないと思う。滝川では、もともと人間的なつながりが地域内にあってこそ地域ぐるみが可能だということを学んだ。

また、長岡では「場」の重要性を感じた。今回の4地域各地の活動が地域ぐるみかどうかというと、各地にまだら模様があり、強い面も弱い面もある。ただ、今回挙げられたような要素のすべてがそろわないと活動できないわけでもないことも分かった。

竹内：今回、共通認識を持たれている言葉のように当然のごとくJICAといっているが、各支部、

本部、在外事務所などJICAでもそれぞれに違う顔をもっている。みなさんはどの部分をイメージして議論してこられたのか。自分は現場をもっているので、各支部と在外事務所のつなぎ方など、「JICA間協力」があってもよいと思っている。持続的な国際協力には水平的な進め方が重要。なかでも環境に関する理解も他分野も支える元である教育がもっとも重要と考える。

四国NGOネットワーク（SNN）は、運営委員がみな現場を持っているので、まずはもっと情報共有をして大学とも連携する必要がある。専任でコーディネーター役をやる人が必要になるのには時間がかかる。ただし、JICA四国には集まる場は提供してほしいと思う。我々の活動も効果が目に見えてきているので、JICAにとってもほうっておけない存在だと思っている。5年後をめどに、またJICAとの関係性を見直せばいいと思う。

饗場：実際のところ、JICA四国がSNNの事務局機能を担うということはありえるのか。

杉澤：ポイントは、ありえるかありえないかではなく、JICAの硬いスキームでは「できない」といわれてしまうだろう。だが、話をもっていき続けることで折り合いをみつけていかないと協働にならないので、ある意味、今、JICAはやわらかい中間支援的発想をもてるのかどうか試されていると思う。

河野：この議論には二段階あると思う。最初の一歩は、どこの組織や団体、取り組みにもあるような、個人が試行的にやってみようというステップ。その次のステップは、その動きを受けてしかるべき立場にある人々が形にしていくこと。このプロジェクトはこのうち、前者の取り組みである。杉澤さんのコメントは二つ目のステップについてのことだといえるのではないか。

毛受：JICAももちろん関心はあるが、JICA頼みでいいのか、という点もある。

羽賀：JICA全体では、ODAの枠での活動なのだという理由で国内連携など不要だと言い切る人もいる。コーディネート－理論－コンセプト化－発意、という流れがうまくいった事例をどのように引き上げるか。JICAの課題は、せっかく支部を配置しているのだから。各地域ごとの特性をどれだけ掘り出して理解して、培ったつながりを後任にも引き継いでいくかということ。

高谷：ふと、今回集まっているアクターが別の地域に行ったらどうなっていただろうと考える。杉澤さんや羽賀さんが相手の地域にいたら、どのように地域の素材を料理していくか。大上段に構えて「国際協力」といわずに自然発生的にやっていくにはどうするか。

前田：我々もJICAスキームの中でしかやれていない。3年後について考えると不安にもなる。ただ、JICAもやはり成果を求められるので、そこをやわらかく幅広い視点を持っていただけるとありがたい。地域を知っているのは我々なのだから。

松本：JICAは黙って金を出せ、と思われているのかと思ったが、我々もコンセプトを出してい

くとよいと知ることができて励みになる。この点は責任をもって広尾センターで取り組みたい。

これまで、途上国の行政が機能していないところを後押しして進める役割もあったが、日本でも、行政からこぼれ落ちることはある。国内のしがらみがない我々だからこそできる仕事もあるかと思う。

滝村：市民参加関連の業務をする者の悩みを共有させていただきたい。JICAの本来的業務は途上国での活動。その視点からみて国内の市民参加を促す3つのメリットとして、1．国際協力に対する市民の理解が増すこと、2．担い手の育成ができ、政府間協力に限らず多様化する途上国のニーズに対応できるようになる、3．途上国での市民とその政府のつなぎ役となる期待、がある。ただ、JICAにとっては、国内地域の活性化が仕事というのではなく、活発な動きのある地域のアクターは、仕事上組みたいパートナーとなる。市民の発意を促して継続させていく仕掛けづくりを一緒にやっていくにはどうするか、という視点を広尾にもっていきたい。ただ、担い手育成をJICAが直接やることについては、「おこがましい」という感じがしていて、「しゃしゃり出る」べきではないと感じる。

杉澤：でも、それではなぜ国内連携をうたっているのか。中間支援的に市民発意の国際協力を推進したいと一番強く言っているのはJICAではないのか。協会は多文化共生関連の業務で手一杯なので、各地に点在する発意や活動を線につないで構造化し、途上国に反映させることができるのはJICAだけ。そういった意味で、専任のコーディネーターを配置していくと地域展開をするには役立つ。

山内：JICAにとっての第一義は途上国支援で、我々は地域での活動が第一義。だが、それは相容れないものではなくて、担当者がどうさばくかにかかっている。スキームをやわらかくアプライしてくれると、次につながる可能性も出てくるので、まずは話を聞いて一緒に制度づくりをしていけたらと思う。

滝村：JICA内では、スキーム間の垣根を下げることが課題。支援型からパートナー型への連続性がない。そのシステムをアクターの皆様とつくっていくことは非常に示唆にとむことになる。

毛受：JICAもやわらかくなってくれないと広がりが出ないが、国内連携をやろうという自体がマイノリティ。この集まりでどういう提案をトップに対してできるか。

饗場：今議論している点は、国際協力に対する根本的な理解、定義づけによって違ってくる。我々のような非政府の立場の人間は、「ODAによる国際協力」と「市民による国際協力」を少なくとも対等で考えるが、JICAはあくまでODAの実施機関であるという立場から考えるなら、「市民による国際協力」というものは「ODAによる国際協力」を補完する「従たる」ものという位置づけになってしまう。四国NGOネットワークの事務局機能をJICA

が代行するかどうかという問題は、まさにこの点のとらえ方によって考え方が異なってくる。国際協力はODAが主であり、JICAはその実施機関とみるなら、JICAは四国NGOネットワークの事務局機能などできない。しかし国際協力はODAばかりでないという理解なら、JICAが事務局機能を担う形で「市民による国際協力」を推進するという選択肢も可能になる。だから、日本政府・外務省が、国際協力の意味をどのように理解するのか、という根本的な問題提起になる。

羽賀：JICAは発信が下手。人材つなぎと情報提供だけでも大きな財産なので、地方センターの担当者の顔つなぎなど、発信力・受信力を強めること。JICA内部の整備が先決ではないか。

毛受：滝川の状況もそうだが、資金という要素は非常に大きい。

前田：北海道の資金に関する課題は、もうJICAではなく政府レベルの課題。市町村行政自体の破綻がきているので、政府が国際協力を明確化しないと、地方なんて何もできない。

滝村：タテ割り行政の議論でいくと、国際理解教育は文科省の担当だったり、いろいろな越えるべきタテ割りがあり、それらを飛び越えていくロジックを提案していただければと期待している。

河野：およそ課題とよばれるものは、国際協力に限らずマルチアクターで取り組まねばならないことも分かった。もし次回似たことができるならば、表立った国際協力だけではなく、地域力のある地域を入れたらよいと思う。

（休憩）

セッション2：4地域間の今後の連携の可能性

饗場：市民参加協力プログラムについて話が聞きたい。

松本：10万円程度のものから申請できて、海外現地で活動しているのがベースだが、途上国から招くのもあり得ると思う。日本人しか参加しないのでは難しいが、まずは話を聞くことはできる。そこから先は各国内機関の判断に任せる方向にある。運用の妙も必要だと思っている。

杉澤：このプログラムは昨日ご紹介した教員ワークショップのフィリピン教員ツアーにも使わせていただいた。トライアル的なものにも使えるので、このプログラムをうまく運用できる人をおけばとても良いスキームだと思う。

藤野：JICAトップページをスクロールダウンして「ナレッジサイト」をクリックすると、このプログラムの事例などを紹介しているのでご参照ください。

毛受：本日まだ発言していない方からもご意見をいただきたい。

三橋：「国際」と地域をつなぐのは地域の人が自分たちでやるべきことだが、グローバルな流れ

のなかで地域性がけずられていくことにどう対応したらよいのか。

羽賀：面識がなくても地域の人にとって「とりあえず相談してみよう」と感じることのできる場となるのが重要。

毛受：JICA本体が国内連携の仕組みづくりをし始めると矛盾が出てくるが、外のノウハウのある大体やアクターと一緒にやるとよいのではないだろうか。

杉澤：各団体は設立の目的が違いそれぞれ本来業務があるので、JICA内にそれ専門のスタッフをおくのがよいと思う。

滝村：まず最初の取り組みとして推進員の配置をしている。

竹内：地域性によって、協会に限らず、NPO/NGOセンターやNGOに配置してもよいのではいか。

新田：コーディネートを専門的にできる人材を推進員としてSNNに配置してはどうか。行政も変わってきており、連携できる可能性が増えてきている。NGOの中にJICA推進員がいればさらに変わると思う。また、各地に羽賀さん、杉澤さんのような人がいれば理想的だが、それは難しい。人材育成や情報共有のためにも本会議の各地域を視察するスタディーツアーを開催できれば刺激になるのではないか。地元の行政関係の会議で長岡の事例などを紹介しても、なかなか伝わらず、イメージすらつかめないようだ。

饗場：たくさん報告書を作成する予算をとるならば、それより、ポテンシャルのある地域の人材をスタディツアーとして招き、今回参加している地域に連れていき、実際に見て聞いてもらうほうがより効果的と思う。

井出：推進員として議論を聞いているが、どこまでが自分たちの仕事か私たち自身も悩んでいる。半JICA半市民の視点。八王子市には協会がないので、市に席を置いている。東京にはJICA以外にも多くの団体があるので、JICAである必要はないのではないかと迷うことがある。これから、自分の仕事に対する考え方を整理しながらやっていきたい。

藤野：地方出身者として地域活性には地域に何があるのかを知る必要があり、そこは地域の人でないと分からないところであるが、知っていてもぼんやりしているとその素材を活性に生かすことはできない。ただ、生かし方に気付いたとしても一人でできることではなく、地域ぐるみの重要さをこのプロジェクトを通して学んだ。

毛受：新田さんのアンケート問2について少しご説明いただきたい。

新田：カンボジアではマンゴーが多く実っていて、素材として活用できる。滝川で「手作りの家とまと」を訪問し、ジャム作りの技術を応用できると思った。例えば、セカンドハンドからジャム作りのためのボランティアをカンボジアに派遣する前に北海道で交流的要素を備えた研修を実施することも考えられる。また、「小指会」の学生たちと長岡や武蔵野の学生たちと交流させるような国内ツアーも実現できればと思って書いた。

前田：ジャム作りよりは気の接ぎ木の技術が北海道ならではのもの。リンゴの木の接ぎ木の技術もマンゴーの木などに応用できる。滝川でも、教員などの育成という意味で、今回のことをご縁に長岡や武蔵野に派遣して刺激を与えたい。

毛受：何か4地域をつないでいくアイデアはあるか。

羽賀：滝川とは持っているノウハウを共有したい。地域のつながりや積みあげが「文化」。

前田：協会が消えてしまいそうなところとつながって広域化させて、広いプラザを作くろうと思って、これまでに付き合いのなかった協会にもアプローチをしている。

羽賀：滝川に行って、パラシュートにエンジンを付けるアイデアをレスキューに使えると思った。バイクの「走り屋」たちにも、その技術が災害時に役立つから、と一声掛けるだけで彼らも変わる。どんなものにも目線に社会性を与えるだけで大きく変わる。

三橋：東京にいる「ガングロ」の女子高生たちを滝川に連れて行くとどうなるかな、とふと考えた。

杉澤：実際、ACTIONのワークキャンプで「キャバクラ勤め」や「ホスト」をしていた若者たちが変わっていき、最後には「はじめて人間として生きていると感じた」という言葉を言うまでになる。横田さんのあの茶髪、短パン、ビーチサンダルスタイルには、他の青年をインスパイアして「自分も国際協力ができる」と思ってもらいたいという願い、ねらいもある。プログラムの柱であるプロセス、理論、協働型連携というものは、人間がいれるもので、コーディネーターの専門性。地域にあるもの、素材を見ることができるかどうか。また、それをつないで一流の場をつくれるかどうかにかかっている。

羽賀：子どもや青年たちは本気になれる場所がないから生煮えの状態。杉澤マジックは人を本気にさせる。

滝村：アンケートの問5（2）について説明をいただきたい。

杉澤：このプロジェクトで得た知見を共有したいという意味。

毛受：まだ案として出ていない組み合わせとして、長岡と四国がつながるにはどうすればよいか。

羽賀：四国での会議には出席しなかったのでまだ分からないが、今度、徳島で講演して皆様に会うのを楽しみにしている。

饗場：県と県国際交流協会が開催する講演会で講演していただくことになった。講演者の案をたずねられた際、今回のプロジェクトで出会っているので、すぐに思いついてお引き合わせした。ただ、知事レベルまでを巻き込んでいくのはなかなか難しい。

毛受：これまでの議論の積み残しとしては、企業との連携と四国の行政を本気にさせるか。

羽賀：行政は在住外国人に責任を持っているので、「災害」を使うと話しが早い。JICAは大学生ぐらいからの参加を考えているが、人はいきなり生まれない。杉澤と周囲の育て合いの相

関関係を解明すると答えがでるのではないか。

竹内：ESDとどうつないでいくか。行政に当てはめたときにESDは総務省やJICAだけの問題ではなく、まさに地域ぐるみ、マルチアクターで取り組まなくてはならず、その視点はESDで関わる人々とも共有している。

山西：市民が、行政のタテ割りで出てくるものをどう使うかが重要だろう。

杉澤：我々は国際交流協会なので国際理解教育と銘打っているが、コンセプトとしては「人間理解」。だから、担当教科を問わず教員が参加できる。

山西：身近な協力関係づくりから。切り口はどこからでも入ることができる。

饗場：羽賀さんもおっしゃった「社会性をもたせる」ことと「人に必要とされること」は国際理解教育のキー概念である「自己肯定感を高める意味でも→こと」と表裏一体であると分かった。

新田：四国での行政との協働の実践例として、セカンドハンドでは、カンボジア人学生の招へいを教育委員会と実現した。当初、県の国際国流担当に持ち込んだが、カンボジアに特定して実施することはできないとシャットアウトされたものを教育委員会に持ち込んだ。

（昼食）

セッション3：「マルチアクター」を拡大するための方法と課題

毛受：午前中は地域の特性について議論し、主に次の点が挙げられJICAに対する期待の高さがよく分かった。ただ、JICAで国内連携に関わっているのは必ずしもマジョリティではなく、彼らをどのようにしてマジョリティに押し上げていくか、我々にとっても課題である。

- 地域連携の専門家をおく意義。
- JICAがすべての地域の協力に主導的立場をとるべきか否か。
- JICAとして市民の提案があれば協働するというスタンスをとるのか、積極的に市民の発意を発掘していくのか。
- 各地ですでにあったつながりをさらに広げていき、地域の「人間力」をつないでいく必要がある。

吉田：日本国民・市民として、他の人々と一緒にどのようにつながっていけるかが我々の課題。

毛受：JCIEでは昨年度は日米間の姉妹都市交流を活性化させる方策について議論するプロジェクト（日米地域間交流活性化プロジェクト）を実施し、その議論をもとに今年度は読みやすいハンドブックを作成している。また、今年度はEUの市民間協力のリーダーの訪日を実施し日本のアクターと学びあうプロジェクト（コミュニティ主導の国際協力・日欧交流プログラム）を実施し、滝川の皆様にも協力いただいた。国際協力はワンウェイではなく、

学ぶことでもあるが、そのコンセプトはメインストリームとしては知られていないのが現状といえる。

羽賀：姉妹都市の活性化は大きな命題だと考える。出会いを良い信頼関係に保っていると、災害時にも即座に協力態勢が組まれる。

竹内：姉妹都市というのはすでにつながりがあるフレームなので、NPOでも活用できるコネクションとなる。松山市とサクラメントのNPO交流をコーディネートしたこともある。

新田：韓国でも国際協力活動が活発になってきて、カンボジアにも入ってくるようになった。そこで、韓国のNGOとセカンドハンドで一緒に一つの校舎を造ることになった。また、そこで8月には韓国、カンボジア、日本の青年の交流シンポジウムを催すことになっている。ちなみに、韓国ではスタディツアーの概念自体もまだ定着しておらず、チャリティショップについてもノウハウ共有をすることを考えている。

吉田：KOICAとJICA、KOICAと韓国のNGOとJICAという連携も始まっている。

毛受：どのように他の地域に広げていくか。

杉澤：一人一人ができることには限界がある。地に足のついた市民間協力をつくりには。地域にとっては、「我が地域」の付加価値になるかどうかがカギ。JICAは地球規模の課題にどう取り組むかが課題。私なら、各地にある素材を集めてどう見せるか。そのためには人材が要る。いかにプロフェッショナルに市民の発意をスクリーニングして素材を見つけてきてプログラムにするかが重要と思う。

山内：高齢化率25％の滝川は人口も少ない。今回の4地域の中でもっとも厳しい状況ではないかと思う。都市部には戦後に人材が集まり、彼らが育っていったが、これからその資源をどうするのか。地方には、技術や長年蓄積された知恵もあるが、継承する人がいなくて廃れようとしている。

滝村：その点については、今回の参加4地域の交流・協力もありえるのではないか。

羽賀：市町村合併後の周辺部の不公平感が大きな問題となっている。また、JICAの弱点は直球勝負なところ。アマチュアはその積極性に対して引いてしまうので、意外性を売るのがよいと思う。

山西：報告書は、この議論の部分を誰がどのようにまとめるのか。

毛受：基本的には私が担当する。ただ、各地のセクションについてはそれぞれの意思を尊重したい。河野さんにもODAの専門家として、国際協力のその部分と、このプロジェクトで議論してきた類の国際協力とをどのようにつなげるか、という視点で書いていただこうと思う。

杉澤：山西先生には、全地域を見て国際理解の切り口で体系立てて書いてもらってはどうだろうか。

毛受：賛成する。

山西：地域づくり、国内だけではなく国際協力する先の地域のことも視野にいれて、かつ、それが日本にも循環して戻ってくることがうまく伝わるようなものにしてほしい。

松本：広尾に持ち帰って具体化させていくのが我々の仕事だと認識している。

饗場：「です・ます」、「だ・である」など文体やスタイルはどうするのか。報告書は往々にして、即、本棚かゴミ箱に直行してしまうので、なるべく読ませるという工夫が強くいる。

山西：ある程度外部向けなのであれば、アクションプラン2ページ目の（1）～（6）をもう少し整理してはどうか。

毛受：アクションプランは実行を義務づけるものではないが、外の人々にとって参考になるものにしたいという主旨。

栄：　アクションプランと他二人によって書かれるものとの違いは？

毛受：同じ地域でも皆経験や立場が違うので、多少内容は重なるかもしれないが問題ないだろう。

杉澤：各地域のプロセスや展開が見えるような見出しがあるとよいと思う。例えば、滝川は「自治体主導から市民主導へ」、長岡は「国際協力のプロの地域展開」、四国は「NGOネットワークの取り組みと展開」、武蔵野はコーディネーターについてなど、メインのメンバーが自分の立場で書き、あとの二人は側面的にその地域での活動について書くというのはどうか。その方が各地域の特徴が見えやすいと思う。

羽賀：タイトルを3名で共有して、1名のキーパーソンが（1）事実関係を紹介して、（2）アクションプランを書く。後の2名は（1）に基づいて自分の立場から書く、というのでよいのではないか。

滝村：それぞれに、このプロジェクトに参加して得たものについても書いていただきたい。大量頒布にむけた印刷の予算はまだついていないので、現段階ではプロジェクト報告という位置づけとなる。

饗場：「市民間協力」は「日本市民－発展途上国市民」という当初のままの考え方ではなく、日本市民同士がどのように連携していくか、ということに重心を置くのでよいのか。

毛受：それでお願いしたい。ただ、その言葉の考え方については私が担当する冒頭の部分でふれるが、それぞれにふれていただいてもかまわない。

杉澤：武蔵野はアイデアが固まった。タイトルは「マルチアクター間による教育協力の展開」。最初に教員ワークショップの事例を紹介し、杉澤がマルチアクターに関わるコーディネーターの役割についてこれまでのコーディネーションを具体的に書く。次いで横田さんがNGOが果たしてきた役割とNGOが国内地域で活動を展開することの意味について、そして最後に山西さんが教育協力の観点から書く。また、他の地域で得た物をそれぞれのセクションでふれるようにする。

松本：予算がとれれば多く配布したいと思っている。また、それぞれに他地域の役に立つ用意があることも匂わせていただければと思う。

羽賀：JICAのスキーム一覧を添付するとよいと思う。

松本：各事例がどのスキームに当てはまるのか分析するのもあり得るかと思う。

杉澤：このプロジェクトの成果が報告書だけでは悲しい。この後、例えば試行的に四国とあと2地域ほどにコーディネーションができる専門性を持った人材を配置してみて、このメンバーで年1回その効果を検証していくなどの取り組みを継続すれば、やわらかいスキームづくりにも役立つのではないか。

竹内：参加地域それぞれでコーディネーター研修をした人を配置してくれるともっとよい。

毛受：では、報告書については引き続きやり取りをさせていただくとして、会議はここで終了としたい。一年間どうもありがとうございました。

JICA
ジャイカ